

たまぐず・ホーム

作 少年 ユキオ

登場人物

玉山 たま子 (積み木の住宅モデルハウス展示場、案内係。)
ワタル (取り立て屋。)
フミ (たま子の同僚で幼馴染。)
パパ (たま子の父。)
ママ (たま子の母。)
ちん (タビト。)
ぼち男 (タビト。)
きんぎょ (タビト。)
所長 (たま子の上司。)

積み木の住宅モデルハウス展示場、モデルハウスの一室。

リビング。

静かに流れる「蛍の光」。

たま子登場。

たま子 本日は積み木の住宅モデルハウス展示場にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。申し上げます。申し訳ございませんが本日の営業はこの時間を持って終了とさせていただきます。当モデルハウス展示場が、皆様の夢のマイホームご購入の一助となれば幸いです。本日は誠にありがとうございます。ありがとうございました。（深々と一礼する。）

間。

たま子 ねえ、いるんでしょ。……出てらっしゃいよ！……ワタル！……ワタル！……ワタル！……いるんでしょ。……あつ、フフフツ……そういうこと？（ソファの後ろに回り。）ここだ！（テーブルの下を覗き込み。）ここでしょ！昔よくやったよね、かくれんぼ。ワタルはかくれんぼの名人で、わたしはずーっと鬼のまんま。（あらゆる所を搜索しながら）ワタル、……ワタルくん、……ワタルちゃん。そのうち、カラスが鳴いて日が暮れて、ワタルが見つからなくて悲しくて、しゃがみこんで泣いてるわたしの後ろに、申し訳なさそうな顔をしたあなたが立っていた。

たま子、突然しゃがみこんで泣く、振り。しばらくして後ろを振り向くが誰もいない。今度は激しく泣きじゃくる、振り。再び後ろを振り向くが誰もいない。

たま子 もう、いかげんに出てらっしゃいよ！わたしをいつまで鬼にしておく気！？知ってるのよわたし。あなたはいつもそうやって、どこかに隠れてわたしを見ているの。そう、まるでストーカーの様に。ワタルは小学生の時もそうだった。いつも私の後ろをこっそり付いてきて、どこかに隠れてじっと私を見ているの。いつだったか、わたしがお母さんと近所のスーパーへ買い物に行った帰り道、ふと背中に視線を感じたの。振り返ってみると、やっぱりワタルが後から付いて来てた。わたしはあなたを問い詰めたわ。「どうして付いて来るの？！」そしてあなたはこう言った。「ただの偶然だよ。」フフフツ、お決まりの常套句……。好きなら好きって言えばいいじゃない！いつまでストーカーやってるつもり？！まさか……。夕べベランダに干しといたわたしの下着盗った

のワタルじゃないでしょうね・・・?!あなたなの?あれ、わたしのお気に入りなの。どうしてもほしければ他のと換えてあげるから・・・。お願い、返してわたしのパンツ!

ワタル、普通に登場。

たま子 ワタル!やっぱりいたんじやない。どうして早く出て来てくれないの?

ワタル ……。

たま子 いったいどこに隠れてたのよ?!さんざん探したんだから……。

ワタル 隠れてなんかいない。今来たところだ。

たま子 嘘よ。あなたがわたしの前にひょっこり現れたのが三日前、毎日ずっと隠れてわたしのこと見てたくせに……。

ワタル どうして俺がそんな事をする必要がある?

たま子 どうしてって……、そんなことわたしに言わせるつもり?……だいたい告白って言うのはさあ……、男子からって言うのが本当じやないかなあ……。

ワタル 告白?俺があんたに何を告白するって言うんだ。

たま子 それは、ワタルの胸の奥にしまっておいた今まで誰にも言えなかった本当の気持ちを、素直に伝えればいいんじゃないかしら。

ワタル わかった。

変な緊張感が空間を支配する。

たま子 ちょっと待って!(ワタルに背を向けるように、少しかしこまってソファに座る。)いいわよ。

ワタル (一呼吸して。)金返せ。

たま子 えっ?!

ワタル 金返せ。……俺の胸の奥にある本当の気持ちだ!

たま子 ワタルって意外とせこいのね。あんな昔のこと、もう時効じやないの?(ポケット

トから小銭入れを取り出し、百円玉をワタルに差し出す。)はい、百円。

ワタル (受け取って。)何だこれ?

たま子 ワタルが昔、五年生の時にくれたお金。まだ覚えてたんだ。あれは……、そう、夏休みもあと数日を残すばかりでアスファルトも溶かすようなとっても暑い日だった。

わたしたちは残り少ない夏の日を貪るように遊びまわっていたの。あの日もわたしは親友のフミと市民プールでおもいきりはしゃいだわ。楽しかった……。その帰り道、わたしとフミは喉が渴いてしかたなくて、自販機でコーラを買う事にしたの。最初にフミが買ったわ。次はわたしの番、でもお金がない。プール代しか持ってこなかったわたしは、コーラが買えなかった。フミはいじわるだから、わたしの見てる前でコーラを一

気飲みしたの。悔しかった……。その時、どこからともなくワタルが現れて、黙ってわたしに百円玉を差し出した。嬉しかった、と言うよりカッコよかった……。

ワタル そんな思い出話、俺には関係ない。

たま子 関係くないでしょ！わたしの思い出はワタルの思い出、ワタルの思い出はわたしの思い出。わたしたちは幼馴染、同じ時間を共に生きてきた者同士なのよ。

ワタル あんた、何か勘違いしてるようだから言っておくが、俺はあんたと同じ時間を生きてきた覚えはないし、幼馴染じゃない。そもそも俺はワタルじゃない！俺のことを「ワタル。」って呼ぶのはいい加減やめてくれないか。

たま子 (少し拗ねて。) じゃあ、何て呼べばいいの？

ワタル 呼ばなくていい。

たま子 今日はずいぶん冷たいのね、どうして？

ワタル 俺はいつもクールだ。

たま子 クールなの。じゃあこれからクールって呼ぶわ。

ワタル 呼ぶな！

たま子 ワタル……？あなたはワタルなの……？本当は誰？

ワタル つくづく面倒くさい女だ……。俺は取り立て屋だ。

たま子 取り立て屋……？変わった名前ね。

ワタル 名前じゃない！取り立て屋。借金してる連中から金を取り立てる……。俺の仕事だ。

たま子 じゃあもう仕事は終わったのね？

ワタル まだ、これからだ。俺はまだ何もしていない。

たま子 どうして？もう返したじゃない……。それで足りないって言うなら(小銭入れからもう百円出して。) はい。

ワタル ふん、そんな小銭はいらない。

たま子 ワタル、変わったわね。

ワタル だから、俺はワタルじゃないって言ってるだろ！

たま子 わたしの知ってるワタルは百円をバカにするような子じゃなかったのに、いつからそんな風になったの？

ワタル 俺は前からこんな風だし。それにワタルじゃない。

たま子 もう、いいわ。それで、いくら返せば気が済むの？(独り言のように。) だいたい小学生のときに借りたお金じゃない。というより、くれたと思ってたのに……。で、いくらなの？

ワタル あんたが返すのか？

たま子 返すわよ。そのかわりわたしのパンツも返してね。あれ、お気に入りだから。

ワタル パンツ？

たま子 タベベランダに干しといたやつ、朝無くなってるのに気付いたわ。

ワタル それがどうしたって言うんだ・・・？

たま子 しらばっくれちゃって・・・。

ワタル 俺が盗んだって言うのか？！

たま子 違う？

ワタル 違う・・・！違う違う！俺は取り立て屋で、金にしか興味がない。俺はあなたの

パンツなんか・・・。

たま子 何動揺してるの・・・？やっぱり。

ワタル だから違うって言うてるだろ！

たま子 欲しいなら欲しいって言うてくれれば・・・、ワタルにならあげたのに。でもで

きたら別のにしてほしいなあ。あれじゃなきやダメ？

ワタル だから・・・。(もう、どうでもいいと言う感じで。) ああ、ダメだ。

たま子 どうしても？

ワタル ・・・・どうしても。

たま子 なら、あげる。うふふ・・・。

ワタル じゃあ、返してもらおうか。

たま子 ・・・・？

ワタル あんたが返すって言ったんだ。

たま子 わたしはあげたのに、ワタルはまだ返せって言うの？

ワタル 俺のはビジネスだ。あなたのパンツとは訳が違う。

たま子 わたしのパンツをバカにする気・・・？まあ、いいわ。それでいくら返せばいい

の？

ワタル 五千万。

たま子 どうして百円が五千万になるの？！

ワタル だろうな、やっぱり・・・。それであなたの父親から連絡はあったのか？

たま子 どうして百円が五千万になるの？

ワタル 俺の話を知っているのか？！

たま子 聞いてるわ。ワタルの話なら隅から隅まで。だからどうして百円が五千万になる

の？

ワタル (呆れて。) 百円が五千万になったんじゃない。あなたの父親が借金したんだ。返

済期日はとくに過ぎてるのに金を返さない。それどころか姿を消しやがった。いわゆ

る夜逃げってやつだ。娘のあなたに聞けば何かわかると思ったけど・・・、見込み違い

だったみたいだ。でも、このままあなたの父親が姿を現わさなかったら、金はあなたに

返してもらおう。当然娘のあなたに返済義務はない。そんなことは百も承知だ。ただ、あ

なたの父親が借金したのはまともな金融屋じゃない・・・。闇金だ。どんな事をしてで

も金は返してもらおう。覚悟しておくんだな。

たま子 ワタル、何だか怖い。わたしの知ってるワタルじゃないみたい。

ワタル あいにく俺はあんたの知ってるワタルって奴じゃない。

たま子 何でそんな意地悪なこと言うの？（泣き出す）……（唐突に。）あっ……。

ワタル どうした？

たま子 ワタルはパパを探してるのよね？

ワタル 何か知ってるのか？！

たま子 知らない！

ワタル 知ってるんだろ？

たま子 知らない。知っていてもあなたには言わない。だってあなたはわたしの知ってるワタルじゃないって言ったもの。わたしはわたしの知ってるワタルにしかわたしの知ってることを教えない。

たま子、ワタルに背を向けてソファアに座る。

ワタル、しばらくしてたま子の向かいのソファアに座る。

ワタル 俺がワタルじゃないって言ったのは嘘だ。本当は俺がワタルだ。

たま子 嘘よ。わたしが知ってる事を聞きたいからそんなことを言ってるだけ。あなたが本物のワタルなら、証拠をみせて。

ワタル 何を言ってる！今の今までずっと俺がワタルだって言い張ってたじゃないか。

たま子 そうよ、今の今までずっとあなたとあなたがわたしのワタルだった。でも、ほんの少し前から、あなたが本当はわたしが知ってるわたしのワタルじゃないかもしれないなって思い始めたの。だから、あなたがわたしのワタルだって言う証拠を見せて。

ワタル 証拠って言っても……、俺は何をすればいい？

たま子 だったら、わたしとワタルしか知らない二人だけの思い出、三つ言ってみて。

ワタル 三つも？！

たま子 あなたがワタルだったら簡単でしょ。言ってみて。まずは一つ目。ほれ。

ワタル （考え込む）……。

たま子 わからないの？！やっぱりあなたは……。

ワタル いや、そうじゃない！急に言われたから思い出せないだけだ。ヒント、ヒントをくれ。

たま子 ヒント？

ワタル 頼む。（手を合わせる。）

たま子 まあ、小学生の頃の話だし……。わたしは全部覚えてるのに、男の子ってどうしようもないわね……。じゃあ、ヒントその一。四年生、遠足。

ワタル 四年生、遠足？……。あっあああ、わかった。小4の遠足のとき、よその学校の奴らに絡まれてたあんたを俺が助けてやった。そんな訳ねえか……。

たま子 ……そんなことあったかしら？

ワタル えっ・・・？あ、あつたさ。ほら、よく思い出してみろ。あれは確か・・・、そうそう、隣の小学校の奴らか何かで、俺がみんな追っ払ってやったんだ、へへっ。

たま子 ……何で絡まれたのかしら？

ワタル それは・・・、ほら、あんたが可愛かったからじゃないか。

たま子 わたしそんなに可愛かった？うふふふ・・・。正解！じゃあ第二問目、どうぞ。

ワタル (独白) 第二問目って、クイズじゃあるまいし・・・、俺は何やってんだ・・・？

たま子 何か言った？

ワタル いいや、何も・・・。

たま子 だったら早く答えて！

ワタル ……ヒント。

たま子 えっ、また?!しかたないな。ヒントその二・・・。ああ、でもこれ言ったら、

すぐわかつちやうかな・・・？まあ、いいか。じゃあ、げた箱、上履き・・・どお、も

うわかつたんじやない？

ワタル えっ?!あ、ああ、もちろん。げた箱、上履き?・・・あつ！朝学校に行った

ら上履きがなかった。上履き隠されたんだ、あんた・・・。違うか。

たま子 そんなこと・・・、あつた。

ワタル あつたのか？

たま子 えっ？

ワタル いや、あつたんだ。間違いなくあつた。

たま子 うん。でも、すぐにワタルが見つけてくれたよね？

ワタル うん、ああ・・・そうだったな。俺が見つけてやった。

たま子 でも、誰がそんな意地悪したんだろ？

ワタル そりゃあ、あんたが可愛かったからそれを妬んだ奴がやったんじゃないのか？

たま子 わたしが可愛かったから・・・、それを妬んで・・・？だったらフミだわ。あの

子ならやりかねない。わたしにはいつも意地悪だったもの。

ワタル それで？正解・・・？

たま子 そうねえ・・・？まあいいわ、正解。

ワタル なら、次が最後だな。

たま子 ええ。でも、最後はノーヒントだから。

ワタル ええーっ、そりゃないぜ。

たま子 何言ってるのよ！あなたがワタルなら最後までいいノーヒントで言ってみなさい！

ワタル へいへい、わかりました。(考える)・・・。

たま子 早く！

ワタル そう急かすなって。えーっと・・・ああつーうん?・・・。

たま子 十秒前、9，8，7，6，五秒前、4，3，2，1・・・。

ワタル ちよっと待て！わかつた。あ、あんたと俺は約束したんだ！

たま子 約束？何を、いつ、どこで？

ワタル あの・・・、約束したんだ。

たま子 だから、何を、いつ、どこで？！

ワタル あんた、そんな厳しい人だったの？

たま子 当り前じゃない！あなたがワタルかワタルじゃないかは、わたしにとってとって

も大事なことなの。さあ、早く答えて。何を、いつ、どこで？！

ワタル あの、それはだなあ・・・、（小さな声で。）結婚。

たま子 えっ？何？！

ワタル 結婚！

たま子 結婚？・・・結婚の約束？

ワタル よくあるだろ・・・。小さい子供同士が「将来大人になったら結婚しようね。」って、そう言う軽いやつ。

たま子 いつ、どこで？

ワタル えっ？ああ、それは・・・、あっ！あのとき。ほら、自販機で俺があんたに百円やった、あのとき。

たま子 それで？

ワタル それで？！・・・それで、俺があんたに百円やったら、あんたは「返す。」って言ったんだ。でも俺は「返さなくていい。」って言った。

たま子 確かにわたしはワタルに「返す。」って言って、ワタルは「返さなくていい。」って言ったわ。

ワタル 言ったの？ホントに？

たま子 それから？

ワタル それから、俺は「返さなくていい。」と言った。

たま子 だからその先は？！

ワタル ない。

たま子 それだけ！でも、それがどうして結婚の約束になるの？

ワタル ああ、俺はあのとき「返さなくていい。」としか言わなかったけど、本当は・・・。

たま子 本当は、何？

ワタル 本当は・・・、本当は・・・、ホントは、本当なんだ。

たま子 何それ？！男の子でしょ、はっきりしなさい！！

ワタル はあー（深いため息。）・・・。本当は、「大人になったら結婚するんだから、返さなくていい。」って言いたかったんだ。

たま子、ワタルの横に座りなおす。

たま子 じゃあ、あれはワタルのプロポーズだったのね。

ワタル 子供の頃の軽いやつだから……。

たま子 でも、わたしにプロポーズしておきながら、どうして突然姿を消したの？

ワタル 姿を……？

たま子 そうよ、あの日学校に行って、周りの同級生から衝撃の事実を聞かされたわ。ワタルが転校したって……。何も言わずにわたしの前から消えたの……、どうして？

ワタル それは、何て言うか……、親の事情ってやつだろ。

たま子 どうして何も言ってくれなかったの？

ワタル 急なことだったんで、あんたに会って話す時間がなかったんじゃないのか？

たま子 ……。

ワタル とにかくこれで、俺がワタルだったことだ。さあ、教えてもらおうか。あんたの父親はどこにいる？

たま子 知らない。

ワタル 知ってるって言ったろ！

たま子 ……。

ワタル (溜息)……、何拗ねてんだよ。

たま子 だってワタル、転校すること、わたしにだけ黙ってた。

ワタル 違う！俺は誰にも言っていない。たぶん、クラスの誰かがどこかで聞いたんだろ。

狭い町だからな。

たま子 本当に？

ワタル ああ。

たま子 でも、何で誰にも何も言わずに行っちゃったの？

ワタル 親が別れたんだ。俺は親父について町を出ることになった。あのときは、誰にも何も言いたくなかったんだろ。

たま子 そうなの、いろいろあったんだね……。でもよかった。またこうやってわたしの前に現れてくれて……。

ワタル さあ、あんたの父親の居所教えてくれ。

たま子 知らない。

ワタル いい加減にしろよ！

たま子 だって本当に知らないんだもの……。

ワタル 本当に知らないのか？

たま子 うん。

ワタル だったら、初めから知らないって言えよ！なんだよ、変なことばかり言わせやがって……。

たま子 パパの居場所は知らないけど、他の事なら知ってるわ。

ワタル 何?!そっちを言ってみろ。

たま子 うん。あのね……。

突然の音楽。ピンクレディー、「ペッパ―警部。」

フミ登場。

たま子とフミ、音楽に合わせて歌い踊る。そしてラストの決めポーズ、「ペッパ―警部よ」。

フミ (ポーズをとったまま) 決まったわね。

たま子 (ポーズをとったまま) うん。何か用？

フミ お金貸して？

たま子 ダメ！

フミ お願い！今日彼に会うの。次のお給料日に絶対返すから。

たま子 フミ、いつまでこんなことするつもり？

フミ それがねたま子、彼合格したの！これで私も弁護士夫人よ。

たま子 何言ってるのよ、まだ結婚もしてないのに。彼と結婚の約束したの？

フミ それは、まだこれからよ。彼は今まで試験勉強で忙しかったから、そんな事を考える余裕はなかったと思うの。でも、私のことはちゃんと考えてくれてるはず……。

たま子 そうかしら……？

フミ ひがんでるの？私が弁護士夫人になるもんだからひがんでるんでしょ？

たま子 わたしはそんな心の狭い人間じゃないわ！

フミ どうかしら？

たま子 フミのことを心配してるのよ……。だってあんた、彼とともにデートしたことある？彼に誘われたことある？フミからそんな話きいたことないもん。

フミ それは試験勉強が忙しかったから……。

たま子 普通恋人同士って言うのは、どんなに忙しくってもデートくらいするもんだよ。

恋人のことを思ってるんならデートに誘うもんだよ。もしかしてその彼、あんたのことお金をくれる親切なおばさんくらいにしか思っていないかもよ。

フミ 誰がおばさんよ！

たま子 十も年下の彼から見たら、フミはりっっぱにおばさんよ。

フミ 私がおばさんなら、あんただってりっっぱにおばさんじゃない！たま子は私を心配するような事を言ってるけど、ただ妬んでるだけ。十も年下の若い彼で、将来は弁護士。さぞかし羨ましいはず……。ご心配なく。彼はあんたが思ってるような人じゃないか

ら。何よりこの三年間彼の生活を支えたのは私なの。そのために、コツコツ貯めた結婚資金も底をついてしまったわ。そんな私を彼が裏切るはずないじゃない……。今日はね、彼の合格祝いなの。少しいいフレンチのレストランに行って、そこそこのコース料理とそこそこのワインを注文して、そこそこの料理を食べながらそこそこのワインで乾杯。そんな風に彼を祝ってあげたいの。だからお金貸してよ。

たま子 わたしはあんたたちの幸せを妬むような心の狭い人間だから、お金はかしません。

フミ わかったわよ。他で借りるから……。

たま子 誰もあんたには貸さないわよ。あんたに貸しても返ってこないって有名だから。

フミ ……たま子、友達でしょ。

たま子 そうだっけ？

フミ もう何年になる？小学校からの付き合いだから……。

たま子 今まで貸した分、返してくれたら貸してあげる。

フミ けち！妬み女！

たま子 何ですって？！

ワタル 俺が貸してやろうか？

フミ あんた誰？

ワタル 誰だっていいじゃないか……。あんた金に困ってるんだろ？だから俺が用立て

てやろうって言ってるんだ。

フミ 本当に？

ワタル ああ、その代り少々利息は高くつくよ。

たま子 やめたほうがいいわよ。この子に貸しても返ってこないから……。

ワタル 俺は取り立て屋だ。貸した金はどんな事をしても取り返す。(フミに。)それで、

いくら必要なんだ？

フミ 三万円。

ワタル たったそれだけでいいのか？

フミ じゃあ五万円。

ワタル 五万だな。

ワタル、上着の内ポケットから長財布を取り出し、フミに五万円差し出す。

フミ (受け取って。)ありがとう。あなたっていい人ね。

ワタル いいか、俺は親切であんたに金を貸したんじゃない。これはビジネスだ。わかっ

てんのか？！

フミ わかってるって。ありがと。

ワタル ……まあいいか。これで解決だ。(たま子に。)次はあんただ。

たま子 わたし？

ワタル そうだ。さあ、教えてもらおうか。

たま子 何を？

ワタル あんたのパパのことだよ！

たま子 ああ、そうだったわね……。昨日ママから電話があったの。

ワタル 本当か?!それで?

たま子 それでって?

ワタル 何か話しただろ?!何話した?

たま子 でも、わたしが話したのはパパじゃなくてママの方よ。

ワタル ママがいるならパパもいるだろ。いいから話せ。

たま子 うんー・・・? 「元氣してた?」とか「ちゃんと食べてる?」とか・・・。

ワタル 他は?

たま子 他は・・・「今年の夏はあつくなりそう・・・。」とか、そんなところ?

ワタル それだけ・・・? 「今どこにいるの?」とか「どこどこに今いるよ。」とか、そう

　　という会話が普通あるだろ?!

たま子 ない。

ワタル がっかりだ・・・。

たま子 どうでもいいことかもしれないけど、近いうちに会いに来るって。

ワタル どうでもよくない!それだよ、それ。近いうちに来るんだな?

たま子 うん、そう言ってた。

ワタル いいか、パパとママが現れたらここに連絡するんだ。

　　ワタル、たま子に名刺を渡す。

たま子 うん。でも、パパとママに会ったらそんなぶっきらぼうな言葉づかいやめてね。

　　わたしたちのこと、ちゃんと認めてもらいたいから・・・。

フミ わたしたちのこと・・・?何それ?どう言うこと・・・?

たま子 実はねフミ、わたしたち・・・。

ワタル 何でもない!

フミ えっ?

　　ワタル、立ち去ろうとする。

たま子 どこ行くの?

ワタル 俺は忙しいんだ。とにかく、連絡まってるから・・・。パパとママが現れたら絶

　　対教えるんだぞ!

たま子 うん、分かった。お仕事ががんばってね。またね。

　　ワタル、退場。

フミ ねえ、どういうこと?!たま子とあの人、どういう関係なの?

たま子 あかね、わたしたち……。

フミ ああー、やっぱいい。聞きたくない！

たま子 わたしたちねえ……。

フミ (両耳を手で押さえて。) 聞きたくない、聞きたくない、聞きたくない！

たま子 フミ、聞いてよ。

たま子、フミの手を無理やり耳から離そうとする。フミはたま子の手を振りほどき、手で耳を押さえたまま逃げ回る。フミを追い回すたま子。フミ、ついに力尽きて手で耳を押さえたまま倒れこむ。

たま子 フミ、聞いてよ、フフフフ。(フミの手を力づくで耳から離す。) 私たち結婚するの。

フミ いやー！聞きたくないって言ったのに……。何であんたが私より先に結婚するのよ！絶対あんたより先に結婚するって決めてたのに……。

たま子 勝手に決めないでよ。

フミ いつからなの？

たま子 いつからって？

フミ いつから付き合ってたのかって聞いているの！何も聞いてないし。

たま子 会ったのは三日前。

フミ 三日前？！それで結婚？

たま子 うん。会ったのは三日前だけど、ずっと前から知ってる人だし。フミも知ってる人よ、気付かなかった？

フミ 私も……？誰？

たま子 さあ、誰でしょう。

フミ もう！じらさないで教えなさいよ！

たま子 しかたないなあ……。ワタルよ。

フミ ワタル？

たま子 ほら、小5の時に突然転校しちゃった……。

フミ えっ……。？！あのワタル君？クラスの女子人気ナンバーワンの……。

たま子 そうよ。

フミ 全然気付かなかった。あの人ワタル君……。嘘だあー！私の知ってるワタル君は、もっと繊細できやしゃやで可愛い子だった。あんなぶつきらぼうでゴツイ感じじゃなかったわ。

たま子 あんたどこのワタル君のこと言ってんのよ！ワタルは昔から、少しぶつきらぼうだけど優しくてスポーツ万能なたくましい子だったわ。

フミ あんたこそどこのワタルのこと言ってんのよ！私が知ってるワタル君だったら、た

たま子とは結婚しないわ。知ってる？ワタル君は私のことが好きだったのよ。

たま子 それはあなたの思い込みよ。だいたい、フミを好きだったのはしみつたれのマサオの方でしょ。

フミ 思い込みはあなたよ。しみつたれのマサオが好きだったのはたま子よ。いつもあなたに付きまどってたじゃない。

たま子 違うわ！わたしに付きまどってたのはワタルよ。だってワタルはわたしのことがずっと好きだったの……。

フミ そこまで行くと妄想だわ。ワタル君がたま子に付きまどってたんじゃないくて、たま子がワタル君に付きまどってたの、ストーカーみたいに。そもそもワタル君はたま子のことなんて何とも思ってた。むしろ嫌がってたわ。

たま子 嘘よ！それこそフミの妄想だわ。自分が結婚できないもんだから意地悪言ってるのよ。フミは昔から意地悪だもん。

フミ 結婚できないって言う事よ！私だって近いうちに結婚するんだから。それに、私がいっあなたに意地悪した？昔から意地悪なのはたま子じゃない！あなた覚えてる？私は絶対忘れないんだから……。五年生の夏休み、私たち近所の市民プールに行ったよね。その帰り道の事よ……。

たま子 そのことならわたしだってちゃんと覚えてるわ。プールに行った帰り喉が渴いて自販機でコーラを飲みたかったのに、わたしだけお金が無くて飲めなくて、意地悪なフミは一人でコーラを飲んでいた。

フミ 何言ってるの！お金がなくて飲めなかったのが私。一人でコーラを飲んだのはたま子じゃない。

たま子 (フミの言葉を無視して。)そこにワタルがいつものように現れて、可哀そうなたしに百円くれたの。

フミ ワタル君から百円もらったのも私よ！！何でそうなの？私の素敵な思いで盗らないで！

たま子 フミの方こそ、わたしとワタルの思い出盗らないでよ！

フミ ムカつくぅー！もう我慢できない！今までこれだけは言うまいと心に決めてたけど……。たま子、何でワタル君が突然転校したと思う？

たま子 家庭の事情だって聞いたけど。

フミ 何言ってるの？あなたのせいよ！

たま子 何でわたし？

フミ あなたが毎日毎日ストーカーみたいにならないうちにワタル君を付け回すからよ。ワタル君、ノイローゼになってたわ。それを見かねてご両親が転校を決めたの。だからたま子にはワタル君の転校が知らされなかったの。たま子が知ったらワタル君に何するかわからないもの。

たま子 そんなの出鱈目よ！だいいちフミだってワタルが転校したこと知らなかったじゃ

ない。ワタルが転校した日、あんたは風邪で熱出して休んで、二三日して出てきたら「ワタル君がいない！」って騒いでたの忘れたの？！ストーカーみたいにワタルを付け回していたのはフミの方じゃない。そうよ、ワタルがわたしの前から姿を消したのはフミのせいよ！

フミ たま子！いい加減にしなさいよ！何でいちいち話をすり替えるの？！

たま子 すり替えてるのはフミよ！

フミ（深い溜息）・・・もうやめた、こんな昔話。結婚でも何でもすればいいじゃない。

でも、あの人はワタル君じゃない。ありえないわ。

たま子 どうしてフミはわたしの幸せを素直に喜んでくれないのかしら？意地悪だから？
それとも、彼と結婚できそうもないから？

フミ、たま子の頬を平手打ち。たま子、打たれたはずみで倒れる。

たま子 ぶったわね！

たま子、フミ（ハモル様に）。パパとママにもぶたれたことないのに。

フミ 言うと思った。もう、あんたとは絶交よ！

たま子 そんなこと言っているの？わたしと絶好したら、友達いなくなるわよ。

フミ 友達くらい他にいっぱいいるわよ。

たま子 嘘ばかり。

フミ たま子の方でしょ、友達いなくなるのは。

フミ、立ち去ろうとする。

たま子 待ちなさいよ！今まで貸したお金全部返すのよ。

フミ わかっているわよ。バカたま子！

フミ、退場。

たま子 バカ？バカって言ったわね。待ちなさいよ！バカって言った方がバカだからね。

フミのバーカ、バカフミ……。何もぶたなくなっただっていいじゃない……。

音楽、キコロ「Best Friend」

たま子のママ登場。そして歌う。「まーだまだまだやれるよ」から「ベストフレンド」まで。

ママ 今ここから出て行ったのって、フミちゃんじゃないの……？

たま子 そうよ、それがどうしたの？

ママ 何だかすつごく怖い顔してたんだけど、何かあった？

たま子 もともとそんな顔よ、気にしないで。それよりママ、どうしたの？

ママ たま子に会いに来たんじゃない。昨日話したでしょ？

たま子 今日来ると思わなかったから……。でも、どうせ来るならわたしのアパートに
来ればいいのに。

ママ ごめんなさいね、そうゆつくりもしてられないのよ。

たま子 どうかしたの？

ママ (少し楽しそうに。)それがね、私たち追われてるの……。

たま子 ママ、なんだか楽しそう。

ママ だって、人生誰かに追われるなんてそうそうあるもんじゃないし、何だかワクワク
しない？

たま子 うん、ワクワクする。

ママ でしょう、だからねたま子も誘いに来たの。パパとママと一緒に逃げない？

たま子 ううん、そうしたいんだけど……。あのねママ、パパとママに会ってもらいた
い人がいるの！

ママ それって……？

たま子 うん。

ママ そうなの？！

たま子 あれ……？パパは？一緒じゃないの？

ママ ママが駅のトイレに行ってる間にどこか行っちゃったのよ。先に来てると思ってた
のに……。

たま子 きつと迷子になってるのよ。わたし探してくる。

ママ そんなことしなくて大丈夫よ、子供じゃないんだから。そのうち来るわよ。

たま子 でも……、やっぱり探してくる。ちよつと待ってて。

たま子、小走りで退場。

ママ ちよつとまちなさい！さっきの話し……。もう！

しばらくして、フミ再び登場。

フミ おばさん？

ママ あら、フミちゃんじゃない。久しぶりねえ……。ずいぶん大きくなっちゃって。

フミ ははっ……。そうかな？(あたりを見回して。)たま子は？

ママ 出て行っちゃったわよ。パパが迷子になったみたいなの。笑っちゃうでしょ？いい

歳した大人が……。

フミ そうなの……。おばさん、(二万円を差し出して。)これたま子に返してほしいの。ママ これは？

フミ たま子に借りてたの。残りも必ず返すからって……。

ママ 直接返さなくっていいの？

フミ (力なく。)うん……。

ママ どうしたの？……もしかして、たま子とまたやった？

フミ (頷く。)……。

ママ しょうがないわねえ、あなたたちときたら……。昔からそうだったけど、顔を合わせればしょっちゅう喧嘩、そのくせいつも一緒にいたがる。仲がいいんだか悪いんだか……。

フミ 昔から一緒にいたがるのはたま子の方で、私じゃないもの。

ママ そうかしら？それで、喧嘩の原因は何なの？

フミ いろいろ……。でも一番の原因はワタル君のこと……。

ママ ワタル君って、あのワタル君？

フミ おばさん憶えてるの？

ママ 憶えてるも何も、忘れられないわよ。ワタル君のことであなたたちには、本当に手を焼いたんだから……。

フミ あなたたちって……。たま子だけじゃないの？

ママ 何言ってるの、たま子とフミちゃんのことじゃない。

フミ 嘘！私がワタル君に何をしたら言うの？

ママ (笑いながら。)同じこと言ってる。あのときたま子も言ってた、「わたしがワタルに何をしたら言うの？」って……。いい、今だから言うけど、あなたたちがワタル君を追い詰めたの。だからワタル君は転校しちゃったのよ。

フミ 追い詰めたって、どう言う事？

ママ わからないの？たま子とフミちゃんがワタル君を取り合って、毎日付きまとうもんだから、ワタル君ノイローゼになったの。だから仕方なく転校したのよ。

フミ 本当なの？

ママ ええ、事実よ。

フミ ショック！ショックだわ。ずっとたま子のせいだと思ってた……。

ママ 二人は共犯者だったってことね。あなたたちはやることなすことそっくりで、前世は双子の姉妹だったんじゃないかと思ったりもしたわ……。でももう昔のこと、ワタル君も結婚したそうだから、少なくとも女性恐怖症にはなかってなかったってことよ。

フミ ワタル君が結婚したって……。

ママ 最近子供も生まれたって聞いたわ。

フミ おばさんどうしょ！たま子あの男に騙されてる。

ママ あの男って、たま子が付き合ってる人？

フミ おばさん知ってるの？

ママ たま子が私たちに会わせたい人がいるって……。たま子が騙されてるってどう言う事なの？

フミ たま子、その人のことワタル君だと思い込んでるみたいで。おじさんとおばさんのことも探してるみたいだった。

ママ 私たちのことを……。その男って何者？

フミ 取り立て屋って言ってたような……。

ママ 取り立て屋！その男、取り立て屋だって言ったのね？

フミ うん、たぶん。

ママ どうしましょ？こんなに早くたま子の居場所まで……。グズグズしてられないわ。

ママ、玄関の方に走り出す。

フミ おばさん！どこ行くの？

ママ フミちゃんごめん。たま子探してくる。

フミ たま子がどこに行ったか知ってるの？

ママ パパのところよ。

フミ ええっ？

ママ フミちゃんはここで待ってて。もしたま子が帰ってきたら、私が帰るまでどこにも行かないように言ってね。

ママ、退場。

フミ ちょっとおばさん……。私だってグズグズしてられないのに……。(腕時計を見て。)やだ、もうこんな時間、行かないきゃ。

フミ、躊躇することなく退場。

ほどなくパパ、チン、ポチ男、キンギョを引連れて登場。

チン、ポチ男、キンギョは一見ホームレス風で、三人それぞれ首から頭陀袋を下げている。

パパ まあまあまあまあ、どうぞどうぞ、こんなむさ苦しいところで……。

チン いやいや、なんのなんの、りっぱなお住まいで。

パパ おーい、帰ったぞ。誰もいないのか……。？！ママ！たま子……。！生憎留守にしてるようで……。まあ、そのうちどちらか帰って来るでしょ。帰ってきたら夕飯の支

度させますから。

キンギョ 本当か？（ポチ男に。）メシだつてよ。

ポチ男 ……。

チン どうぞお構いなく。

キンギョ 何でだよ？

パパ まあ楽にしてください。どうぞこつち……。三人をソファの方へ。さあ、座つて座つて。

チン、ポチ男、キンギョ、ソファに座る。そしてパパ座る。

チン 私どものような者がお邪魔したら、御家族の方が迷惑なのは……？

パパ そんなことは気にしないで、自分の家のようにしてもらった方が私も気楽で……。

チン それじゃあお言葉に甘えて一晩だけ……。私はチンと言います。隣がポチ男。

ポチ男 ポチ男です。

チン そつちの娘がキンギョと言います。

キンギョ ……。

パパ 玉山です。よろしく。

チン よろしくお願いします……。

パパ それにしても皆さん変わつてるといふか……。個人的なお名前です。

チン 名前と言つても私たちののはあだ名みたいなもので、誰かに付けられた呼び名です。

ちなみにポチ男とキンギョの名は私が付けました。私の名はたぶん誰かが付けた名です。

パパ あだ名と言う事でしたら、私のあだ名は昔から玉ちゃんです。玉ちゃんとよんでください。

チン 玉山さんは私たちとは違います。玉山さんは玉山さんです。

パパ だったら私もあなたたちをちゃんとした名前……。

チン ちゃんとした名前……。もう忘れてしまいました。今の名で呼ばれているうちに、

いつの間にか頭から消えてしまったみたいです。ポチ男はまだ覚えているかい？

ポチ男 いえ、もう……。

チン キンギョはまだ覚えているだろ。

キンギョ 知らねえ。

チン 名前のことは気にしないでください。

パパ はあ……。まあ、そう言う事なら……。それより、さっきの話のことなんです
が……。

チン さっきの話とは？

パパ ええ……。ほうぼう旅をされているとか。

チン お前たちが話したのか？

ポチ男 ごめんなさい、僕が……。

チン いや、いいんだ……。

パパ 聞いてはいけなかったですか？

チン いえ、そう言う訳では……。旅に興味をお持ちですか？

パパ ええ、持ってます。と言うかこれから少し旅に出ようかと……。

チン ほう、旅に。それでどちらに？

パパ できるだけ遠くに、誰も追ってこれないような。

チン たとえば？

パパ たとえば……。できたら南の方がいい……。そう、沖縄なんてどうでしょう。

冬は暖かくて過ごしやすい。

キンギョ 夏は暑いぞお。

パパ ああ、でもおじさんは寒い方が苦手なんだ。

ポチ男 でも、遠くと言う割にはずいぶん近場じゃないですか。どうせ南に行くんなら、南極まで行ってみてはどうです？

パパ はははははっ、さすがにそこまでは……。それにおじさんは寒いのが苦手で……。キンギョ (ポチ男に。) バカかおまえは。おっさんは寒いのが苦手だって言ってるだろ。

何で南極なんだ？！

ポチ男 何だと！

キンギョ おっ、ポチ男が怒った。ポチ男が怒った。やーい、ポチポチポチポチ。

ポチ男 こいつ！(キンギョに掴みかかる。) 人を犬みたいに……。

キンギョ いやーん、ポチに犯される。

チン いい加減にしないかお前たち！ここをどこだと思ってる。場所をわきまえなさい。すみません、教育がなっていないもので……。

パパ いいんですよ。兄妹は喧嘩するものです。

キンギョ 俺たちは兄妹じゃねえ。

パパ えっ？！それじゃ、チンさんは……？

チン 私はこの子たちの父親ではありません。私たちは赤の他人同士です……。

パパ ああ、あのすみません、私はてっきり親子かと……。でも、どうして親子でもな

いあなたたちが旅を……？

チン (深くため息。) それをあなたにお話ししていいものかどうか……。

パパ やめましょう……。なんて言うか、私は重い話が苦手で……。

キンギョ また苦手かよ。おっさんには得意なものはないのか？(小指を立てて。) こっちはどうだ？まだいけるんだろ？

チン キンギョ！お前は女なんだからそんなことを言うもんじゃやない。もう少し女の子らしくしなさい。

キンギョ (しおらしく。) はい……。

チン 玉山さん、あなたが思ってるほど重い話でもありません。ポチ男は家で全く会話をしない両親のもとで育ち、その孤独に耐えかねて親を捨てました。ポチ男……。

ポチ男 はい。父と母は高学歴で父は官僚、母は自分で会社を経営してみたいです。物心ついたときから二人が会話してるのを聞いたことがあります。二人は夫婦というよりただの同居人ようでした。僕もその同居人の一人に過ぎなかったんです……。父と母から愛情というものを感じたことはありませんでした。いつも独りぼっちで、夜の街をうろついています。悪い仲間に使われて、コンビニで万引きしようとした僕に声を掛けてきたのがチンさんです。チンさは何もかもわかっているかのように「一緒にこないか？」と僕を誘ってくれました……。そして僕は親を捨てる決心をしたんです……。

パパ あの、そのどこが……。

チン キンギョはポチ男とは逆です。この子は親に捨てられた方で……。

キンギョ 捨てられたんじゃない、あいつらが逃げたんだ。

チン まあどつちにしても、この子を置いて親が出て行ったんです。キンギョは幼いときに親から虐待を受けてましてね……。逆に大きくなったら親に暴力を振り出したんです。その暴力きたら殴る蹴るは当たり前、金属バットは振り回す、あげくの果てには刃物まで……。とうとう親は暴力に耐えかねて、この子を置いて姿を消しました。

パパ もう、そのへんで……。

チン (無視して。) 親が姿を消して、暴力の矛先を失ったキンギョでしたが、今度はその矛先を見ず知らずのオヤジと呼ばれる男たちに向けました。いわゆるオヤジ狩りです。あるとき、私とその標的になったようで……。キンギョは金属バットを振りかざして私を襲ってきましたが、振り返りにしてやりました。

キンギョ いつかぶつ殺してやる。チンもあいつらも。

チン そう言いながら、私たちは旅をしている訳です。それから……。

パパ まだあるんですか？

チン ここから話の核心です……。

パパ も、もう結構。これ以上は……。

チン そうですか、残念です。

パパ すみません……。それより、あなたたちにお問い合わせがあるんです。

チン それは、旅のことですね？

パパ ええ、でもどうして？

チン 今日玉山さんと出会ったのは神仏のお導き、何か意味があるんだろうと思っています。あなたたちは私たちと旅を共にしたいと考えておられる。

パパ その通りです。私だけじゃなく、家族も一緒に……。

キンギョ ダメだダメだ！おっさんだけならともかく、家族もなんてとんでもない、足手まといだ。

ポチ男 僕も反対です。僕たちの旅は普通の人たちの旅とは違います。それなりの覚悟が

必要なはず……。その覚悟が玉山さんにあるかどうか……。
パパ 覚悟、と言うと……。？

たま子とママ、一緒に帰って来る。

ママ 私は許さないから！

たま子 別にママの許しが無くても、わたしは結婚できるの。それにパパだったら喜んでくれるわ。

ママ たま子、あなたがワタル君だと思っ込んでる男は、私たちを追っている取り立て屋なの。たま子は騙されてるのよ。その男はパパとママを捕まえるために、たま子を利用してただけなの。

たま子 それこそママの思い込みよ。ワタルは間違はなくわたしの知っているワタルよ。

わたしが間違いないって言うてるんだから……。

ママ 目を覚ましなさい！フミちゃんだって、その男はワタル君じゃなかったって……。

たま子 フミは私の結婚に嫉妬してるだけなの！

パパ おーい、お前たち、何を言い争っているんだ。

たま子 パパ？！

ママ あなた来ててらしたの？

パパ ああ、何とか。

たま子 「ああ、何とか。」じゃないわよ。迷子になってるかと思っでずいぶん探したんだから……。 (チンたちに気づき。) このホームレスみたいな人たち、誰？

キングヨ 俺たちはホームレスじゃねえ。

パパ たま子失礼だぞ。この人たちはパパのお客さんだ。

たま子 何でホームレスなんか連れて来るのよ！もう、パパったら。ここはわたしの職場なの……。

キングヨ ホームレスじゃねえって言うてるだろ！

たま子 何あんた、男？

キングヨ 誰が？どこからどう見たって女だろ、おばさん。

たま子 おばさん……。？！あら、ごめんなさい。あまりに汚らしいから、男か女かわからなかったの。

キングヨ 何だと！

たま子 何よ！

ポチ男 でも、僕たちは本当にホームレスではありません……。

たま子 だったら何なの？

ポチ男 タビトです。

たま子 ……？パパ、タビトって何？

パパ チンさん、何です？

チン それをあなた方に話していいものかどうか・・・。

パパ いや結構、話さないでください。

チン （残念そうに。）そうですか・・・。

たま子 とにかく、ホームレスでもタビトでも何でもいいから、すぐ出て行ってもらって！！

パパ たま子・・・。

キンギョ なあ、メシまだかよ。

たま子 あんた、何言ってるの？！

パパ ママ、夕飯の支度してくれないか。

たま子 パパ？！

ママ あなた、そんな悠長なこと言ってもらえないのよ。

パパ どうしたんだい？

ママ 来たのよ、ついに・・・。

パパ 来たのか、好かったじゃないか。実のところ、私はもう来ないと思っていたんだ。

ママ あなた、何の話してるの？

パパ 生理じゃないのか？来ない来ないって悩んでたじゃないか。

ママ 違いますよ！そんなこと、今話すことじゃないでしょ。恥ずかしいわ。

パパ それで、来たのか？

ママ うん。

パパ そうか、来たか！

たま子 嘘・・・、ママ、まだあるの？

ママ そうよ、失礼ね・・・。そうじゃなくて、私が言ってるのは取り立て屋の事よ。

パパ 取り立て屋？！

ママ そうなのよ、たま子にももう会ってるの。

パパ たま子、お前あいつに会ったのか？

たま子 うん。それでね、パパに話したいことがあるの。

ママ 私は許さないから！

たま子 ママに言ってるじゃない！パパ、わたしワタルと結婚するの。パパなら喜んでくれるでしょ？

パパ 結婚・・・？ワタルって誰だ？ママ、いったい・・・？

ママ そうなのよあなた、この子取り立て屋と結婚したいって言うんですよ。あなたからも言ってるよ、そんな事許さないって。

パパ ふむ・・・、たま子よく聞きなさい。仮にたま子と取り立て屋が結婚したらどうなると思う？取り立て屋はパパの義理の息子だ。パパは義理の息子から借金返せと言われるのか？たま子に子供ができたらどうなる？。パパは孫からも借金返せと言われるの

か？たま子お前はどうか？あいつと結婚したら、パパとママに借金返せって言うのか？
たま子 仕方ないじゃない、ワタルのお仕事なんだから。わたしはワタルを応援するわ。
パパ お前と言う子は……。たま子はパパとママを裏切るのか？！

パパ、たま子に手を上げようとする。

たま子 ぶつの？わたしを一度もぶつたことのないパパがぶつの？いいわよ、ぶちなさいよ。でもわたしは絶対ワタルと結婚するんだから。

パパ たま子！！

パパ、たま子に再び手を振り上げるが、ママが止めに入る。

ママ やめてあなた！たま子は騙されてるだけなんです。あの男は私たちから借金を取り立てるために、たま子を利用してるだけなの。

キンギョ 何だ？新手の結婚詐欺か？

ポチ男 やめとけ、キンギョ。

パパ (冷静になって。)たま子が騙されてるって、いったいどう言う事なんだ？

たま子 パパ、わたしは騙されてなんていないの。

パパ お前は黙っていなさい！・・・ママ？

ママ ええ……。あなた、ワタル君のこと憶えてるかしら？

パパ ……？

ママ たま子が小学生だった頃、ストーカーみたいに付け回した男の子。

キンギョ お前ストーカーだったのか。

たま子 違うわよ！ストーカーはワタルの方よ。

パパ 黙っていなさいって言ったはずだ……。そのことなら私も憶えてる。でも今回の事とどう言う関係があるんだ？

ママ たま子はその取り立て屋の男のことを、そのワタル君だと思い込んでるの。取り立て屋の男がワタル君になりすましてるのよ、きっと。私はワタル君のことをよく憶えてるけど、あの取り立て屋がワタル君とは全然思えないの。

パパ たま子、私はワタル君のことはあまりよく知らないが、ママがそう言うならあの男はワタル君じゃないんだよ。

ママ そうよ、たま子。フミちゃんだって言ってたわよ……。

たま子 ママ、フミに会ったの？

ママ ええ、たま子がパパを探しに行った時に……。

たま子 フミは何て言ったの？

ママ フミちゃんもたま子は騙されてるって言ってたわ。あっそうそう、(フミから預かつ

たお金を差し出して。これ、たま子に返しといてって。

たま子 (お金を受け取って) 騙されてるのはフミの方なのに……。自分が結婚できないもんだから、わたしに嫉妬してるのよ。

ママ フミちゃんに何てこと言うの！あなたたち友達でしょ。

たま子 もう、友達じゃないの。わたしたち絶交したから……。

ママ ふふふっ、あなたたちの絶交は恒例行事みたいなものよ……。今度会ったら仲直りしなさい。と言っても、今度いつ会えるか……？

たま子 何言ってるの？また明日会うに決まってるじゃない、同じ職場だもの。たぶんフミはわたしのこと無視するだろうけど……。

ママ それは無理よ。たま子は今日これから、ママたちと一緒に逃げるの。

たま子 どうして？何でわたしが逃げるの？ワタルに会えなくなるじゃない。

ママ たま子は騙されてるの！あの男といたらたま子が何をされるか……。

キンギョ もういいじゃねえか、たま子だっていいおばさんなんだ、自分のことくらい何とかするだろうよ。それよりメシにしようぜ。メシ！腹減った！

たま子 メシメシって、あんたうるさいのよ！ここに食べるものなんてないの！

キンギョ 本当かよ……。おっさん、話がちがうじゃねえか！

パパ そんなことないだろ。ママ、冷蔵庫の中見てみなさい。

ママ だからそんな悠長な……。

たま子 パパ、ここがモデルハウスだってこと、わかってるわよね？

パパ ああ、一応……。

チン (ポチ男に。) モデルハウスって何だ？

ポチ男 プラモデルでないことは確かなようです。

キンギョ メシがないことも確かなようだ。

チン はあー、キンギョはともかくポチ男はもう少し物知りかと思っていたよ。お前は勉強はできたようだが……。ただの世間知らずだな。

ポチ男 世間知らずはチンさんだって同じじゃないですか。モデルハウスのこと知らないんですよ？

チン 何を言うか！私は世間知らずなどではない、世間を知りすぎていてつまらん事は忘れてしまうんだ。

キンギョ おい、たま子、いい加減教えてやれよ。

たま子 あんたさつきからたま子たま子って、わたしより年下でしょ？！

キンギョ そうだよ、たま子よりずーっと年下だけど。だから？

たま子 あんたねえ……！

ポチ男 それで？！モデルハウスって何なんですか？

たま子 うるさいわね！プラモデルよ。

ポチ男 本当に？

たま子 嘘よ。決まってるじゃない……。だいたいあんたたち、いつまでここに居るつもりなの？

チン ひと晩と言うことで……。

たま子 ひと晩って……。まさかここに泊るつもりなの？！ダメよ、絶対にダメ。ここは旅館でもホテルでもないの。もう、こんなこと知れたら首になっちゃうじゃない……。(どこかへ行くこうとするポチ男に気づいて。)ちよっとあんた、どこに行くつもり？

ポチ男 トイレですけど、どこですか？

たま子 トイレなら外にあるわ。玄関を出たら正面に事務所があるから、その隣……。

ポチ男 どうして外なんです？この家にはトイレがないんですか？

たま子 あるわよ。普通に家にあるものは全部あるわよ。でも使えないの、って言うか使っちゃダメなの。この家はお客様に見ていただくものなの。言ったでしょ、モデルハウスだって……。

たま子、周りを見て、あちこち何かを探しだす。

パパ どうしたんだ？たま子。

たま子 あの小娘どこ行っただの……？ママ、見なかった？

ママ 見ないわよ。さっきまでそこにいたじゃない。

たま子 いないのよ……。もう、どこかで悪さしてるんじゃないでしょうね。

チン あの子はあなたが思ってるほど悪い子じゃありませんよ。

パパ そうだよ。多少口の悪いところはあがるが、それほど悪い子じゃない。たぶん、トイレにでも行ったんじゃないのか。

キンギョ、戻って来る。

キンギョ あーすつきりした。(皆が注目しているのに気付いて。)何だよ？

たま子 あんた、どこ行っただのよ？！

キンギョ 何なんだよ？どこに行こうと俺の自由だろ。

たま子 自由じゃないわよ。ここはわたしの職場なの、わたしの許可なくうろつかないで！

まったく……。それで、どこ行っただの？まさかトイレじゃないでしょね。

キンギョ 俺だって小便くらいするさ。

たま子 したの？！どこのトイレ使ったの？

キンギョ だって、この家のに決まってるだろ。

たま子 もうやだあ。何でしちゃうのよ？！トイレは使っちゃダメなの、見せるものなの。

モデルハウスだって言ってるのに……。

キンギョ なあ、たま子は何怒ってんだ？

たま子　こんなの所長にばれたら、本当に首になっちゃうじゃない。
ママ　所長さんならとつくに帰ったわよ。

たま子　本当に！でもどうして知ってるの？

ママ　たま子に会う前に、所長さんのところへ挨拶に行ったのよ。そしたら、先に帰るか
ら、後のことはたま子よろしくって……。

たま子　何なのそれ……。所長の奴、わたしに何も言わないで帰るなんて……。怪しい。
キンギョ　怪しいって？

たま子　うん、最近こう言う事がよくあるのよ。所長、誰にも言わないでこっそり帰るの。
キンギョ　それは確かに怪しい……。

たま子　この誰かと不倫してるのかも……。

キンギョ　誰かって、誰だ？

たま子　そんなのわからないわよ。

キンギョ　想像くらいつくだろ。

たま子　そりゃ想像でなら……。って、あんた何勝手に会話に入ってるのよ。それより、
トイレ掃除しなさいよ！

キンギョ　何で俺が……！

たま子　あんたが汚したトイレ、お客様に見せられると思ってるの？

キンギョ　ふん、やだね……。

チン　キンギョ、ご迷惑おかけしたんだ、さっさと掃除してきなさい。

キンギョ　お前がすればいいだろ。

チン　私に逆らう気か？また、逆さ吊りにされたいんだな？

たま子　逆さ吊りって、何？

ポチ男　キンギョにするお仕置きのことです。

キンギョ　ポチ、余計なこと言うんじゃないよ。トイレ掃除すりゃいいんだろ？

たま子　そのお仕置きって、どんな風にするの？

キンギョ　だから掃除するって言うてるじゃないか！もういいだろ。

たま子　あんたがどんな風にお仕置きされてるのか知りたいの。さあ言いなさい、ポチ。

ポチ男　僕はポチではなくて、ポチ男です。

たま子　そんなのどっちだっついていいのよ。早く言いなさい！

ポチ男　わかりました……。まずキンギョの両手両足を縛ります。

たま子　いきなりハードね。

ポチ男　そしてキンギョの足にロープを巻きつけて、木の丈夫そうな枝か若しくはそれに
代わる物にロープを掛けて引き上げます。これでキンギョの逆さ吊りが完成です。

たま子　結構きつそうね。

ポチ男　まだ続きがあります……。

たま子　まだ何かするの？

ポチ男 ええ。この程度ではお仕置きにはなりません。逆さ吊りが終わったら、今度は水の入った桶か何かをキンギョの頭の真下に来るように置きます。そして徐々にロープを下げていきます。この状況がキンギョにとって一番の恐怖です。

たま子 そんな状況、誰だつて恐怖だと思っけど……。

チン キンギョにとつて、逆さ吊りと水はトラウマなんですよ。この子は幼いとき両親に虐待を受けてましてね、あるとき父親に両足をつかまれて逆さぶりにされ、そのまま風呂桶にドボンです……。

ポチ男 なのでキンギョは極端に水を怖がります。風呂にだつてめつたに入らないほどです。だからこのお仕置きが効くんです。

たま子 何だか残酷、でも面白そう……。それで、どうなるの？

ポチ男 お仕置きの続きですか？

たま子 もちろんよ。

キンギョ いい加減にしるよ。

たま子 いいから……。

ポチ男 はい。普段キンギョはこんな感じで男みたいですが、ロープを徐々に下げだすと「キヤー」とか「ヤメテー」とか急に女の子らしくなります。それが面白くて……。

たま子 あんた、見かけによらずDSね。それで？

ポチ男 それで、さらにロープを下げて、キンギョの頭に水がついた瞬間……。

キンギョ やめる！それ以上喋つたらどうなるかわかってんだろ？！

たま子 あんたは黙ってるの！で、その瞬間どうなるの？

ポチ男 その瞬間キンギョはおもらしします。いわゆる失禁です。

たま子 げっ！逆さ吊りでももらしたら……。

ポチ男 そうです。全身尿まみれです。

たま子 あんた、お風呂はいらないでしょ？それで全身オシッコまみれつて……、何

だか臭うと思つてたのよ。

ママ たま子、やめなさい。そんなこと言つたら可哀そうじゃないの。

パパ そうだよ、キンギョ君だつて女の子なんだ、臭うなんて言つたら傷つくだろ。

キンギョ うるせー！皆でよつてたかつて俺をバカにしゃがつて。みんなみんなぶつ殺してやるからな、覚えとけ！

キンギョ、走り去る。

たま子 ちょっとあんた……！

チン 心配いりませんよ。

たま子 心配なんてするもんですか。ただどこかで悪さでもされると……。

チン 大丈夫、あれでも結構傷ついていますから……。どこかそのへんで大人しくしてる

でしょ。トイレ掃除は私とポチ男でやりますから・・・。

たま子 いえ、結構です！わたしがやりますので。その代りここから出てってください。

パパとママはわたしのところに来てね。

パパ ダメだよたま子のところは、あいつの手が回ってるかも知れないじゃないか。

ママ そうよたま子。ここだって安全とは言えないわ、早く私たちと一緒に逃げましょ。

たま子 あのね、パパ、ママ、わたしはパパとママにちゃんとワタルに会ってほしいの。

ワタルが会いたがってるの。

パパ 私は会いたくないね。

ママ ママだって同じよ、会いたくないわ。あの男はパパとママを捕まえるためにたま子に近付いたの。あの男に捕まったら、ママたち何されるかわからないのよ。もしかしたら、私たちに多額の生命保険をかけてから殺すつもりかも・・・。

パパ それは本当か？

たま子 ママは二時間ドラマの見過ぎよ、ワタルがそんなことするはずがないじゃない。

だから、ちゃんとワタルに会って。わたしの結婚のこともあるんだから。

パパ ダメだ、ダメだダメだ！そんな危ない橋は渡れない。とにかくパパとママはここからは出ない、チンさんたちも一緒だ。

たま子 あっそう、仕方ない、だったらワタルをここに呼ぶまでよ。

たま子、携帯電話を取り出す。

ママ たま子、何するつもり？

たま子 ワタルに電話するのよ。ここに来させるから・・・。

ママ ダメよ、たま子！よしなさい！あなた、早くたま子を止めて！

パパ、たま子の携帯を奪おうとするが、たま子も抵抗する。

そのうち、チンとポチ男もパパに加勢してたま子を押しさえつける。

パパ ママ、今のうちに携帯電話を・・・！

ママ、たま子の手から無理やり携帯を奪う。

たま子 何するのよ、返して！

パパ (あばれるたま子に。) 大人しくしなさい！

ポチ男(肩から提げた頭陀袋の中から、ロープを取り出し。)これで大人しくさせましょう。

キンギョのお仕置き用です。

パパ、チン、ポチ男の三人が協力して、たま子の手足を縛る。

たま子 もう、何でこんなことするの？ほどこいて、お願い。ママ、助けて。携帯返して。ママ ダメよ。お願いだから大人しくして。これがたま子の為なの。

たま子 どこがわたしの為なの？これはれっきとした犯罪よ。虐待よ、虐待！ワタル、助けて！ワタル……！

パパ たま子、騒ぐんじゃない！

パパ、手でたま子の口を塞ぐ。

ポチ男 (頭陀袋の中からガムテープを取り出し。) これで黙らせましょう。

パパ そんな物まで……？

ポチ男 ええ、何かと役に立ちますから……。

ポチ男、パパにガムテープを渡す。

パパ たま子、ごめんよ(と言いながら、ガムテープでたま子の口を塞ぐ。)……。チンさん、あまりゆっくりしてられないようです。私たちも一緒に連れてってください、あなたたちの旅に……。

チン ええ、いいですよ。こうなることは始めからわかっていました。ただ、あなた方にはそれなりの覚悟が必要です。

パパ 覚悟と言うと？

チン まあ、覚悟と言ってもそれほど難しくはないのです。あなた方はこれからタビトとして旅に出ることを忘れてはなりません……。第一に、タビトは一度旅に出たら死ぬまで旅を続けねばなりません。旅を止める時、それは死を意味します……。第二に、タビトはこの世の縁をすべて断たれます。ですから、玉山さんが借金をした人、そしてあなた方が恐れている取り立て屋との縁も断たれます。しかしながら、それと同時にあなた方家族の縁も断たれることとなります……。

パパ 家族の縁が断たれるとは、私たちは家族ではなくなるのですか？

チン ええ、タビトとして旅に出たと同時にあなた方は赤の他人同士です。でも心配しないでください。家族の記憶はあなた方一人一人の中に残ります。ただお互い、家族であったことがわからないだけです。

ママ と言うことは、あなたとは夫婦じゃなくなるのね。でもまた、あなたと初めて会ったあの頃のように、私はあなたをきつと好きになるわ。あなたもそうでしょ？

パパ それはどうだろう？たま子とも親子じゃなくなる訳だし……。

ママ あなた、何変なこと考えてるの！

パパ 何も変なことなんて考えてないよ。たま子とは親子じゃなくなる訳だから・・・、まあ一人の女性として・・・。

ママ それが変なことだって言ってるのよ！

チン うん！（大きく咳ばらい。）よろしいかな？

パパ すみません・・・。

チン 第三に、タビトは今の名、つまり親から貰った名前を捨てねばなりません。呼び名は私が決めます。それに従ってください。どうです、覚悟できますか？

ママ あの・・・。

チン 何です？

ママ その呼び名のことなんですけど・・・。私は何て呼ばれるんでしょう？

パパ ママ、今はそんなことどうだっていいじゃないか。

ママ だって、これから一生呼ばれる名前よ、気になるじゃない。

パパ 呼び名はチンさんが決めるんだ。どんな名前でも受け入れなければならないんだよ。

ママ もちろんどんな名前でも受け入れるわよ。

パパ 受け入れるってことは、ママはもう覚悟できているんだね？

ママ ええ、もちろんよ。あなたは？

パパ 私も覚悟はできている。

チン お二人とも覚悟が出来たようで・・・。呼び名のことなんですけど、実はもう決めてあります。玉山さん、あなたの呼び名はマル男です。

ママ マル男ですって・・・。マル男、呼びやすくて良い名前だわ。

パパ うん、悪くない。

チン そして奥さん、あなたの呼び名はハナです。

パパ ママらしい、良い呼び名だ。

ママ ええ、可愛い名前だわ。

チン 最後に、たま子さんの呼び名は・・・。少し悩んだんですが、タマに決めました。

たま子、急に呻きだす。

ママ どお？たま子、良い名前ね。

さらに呻きたま子。

チン たま子さんは何か言いたいようです。ポチ男、口が利けるようにしてあげなさい。

ポチ男 はい。でもたま子さん、くれぐれも騒がないように。もし騒いだらまた口を塞ぎますからね？

たま子 （何度も頷く）・・・。

ポチ男、たま子の口からガムテープをはがす。

たま子 (一息ついて。) どこがいい名前よ！ いったいどこをどう悩んだらたま子がタマになるのよ。一番安直じゃない。

パパ タマのどこが気に入らないんだ、良い呼び名じゃないか。たとえ気に入らないとしてもチンさんが付けてくださった名だ、受け入れなさい。

たま子 受け入れないわよ。名前なんて関係ないの、わたしは玉山たま子なんだから。それに、旅だか何だか知らないけど、わたしはそんなものに行く気は全く全然ないから！

パパ チンさん、たま子はよほど呼び名が気に入らないみたいで……、変えていただく訳にはいけませんか？

ママ もう、あなたはたま子に甘いんたから……。

パパ いいじゃないか、親子でいられるのもあと僅かなんだ。チンさん、どうです？

チン うーん……、でもおかしいですね。本来私が付けた名は、皆受け入れるはず……。

まあいいでしょ。でも、一度だけですよ。

パパ たま子、良かったな、変えてくださるって……。

たま子 だから、わたしは……。

チン では、ミケ、でどうでしょう。これならたま子さんも気に入るはず……。

パパ どうだ？ たま子。

たま子 猫じゃねえつーの。

パパ 何……？

たま子 だから、猫じゃねえつーの！

パパ 何だ、その口のきき方は！ 私はそんな風にお前を育てたつもりはないぞ……。

たま子 ごめんなさい、パパ。だからお願い、わたしを自由にして？ もうワタルに会ってほしいなんて言わないから。パパとママはその人たちと旅に出ればいい、だってパパとママの自由なもの。だからわたしも自由にさせて？ ワタルと結婚したいの！ お願い。

パパ ママ？

ママ (首を横に振る。)……。

パパ ダメだよ。たま子もパパとママと一緒に旅に出るんだ。皆でやり直そう？

たま子 いやよ！ 絶対いや。わたしはどこにも行かないから……。いったいどこへ行く

って言うの？ 逃げ切れっこないのに。日本は狭いのよ。

ポチ男 僕たちの旅は国内だけとは限りません。世界中ありとあらゆるところを旅します。

ママ じゃあ、ヨーロッパなんかも？

ポチ男 ええ、時には。

ママ 一度行ってみてかかったの。フランスはパリのシャンゼリゼ通り、イギリスは霧の都

ロンドン、そして情熱の国スペイン。憧れてたの。

パパ ママ、観光旅行じゃないんだよ。

たま子 ふん、そんなの無理に決まってるじゃない。海外なんて、いったいいくら掛ると思ってるの？お金なんてなくせに……。

ポチ男 旅にお金は必要ありません。

たま子 じゃあどうやって海外に行くの？泳いで行くつもり？それとも密航？どこでもド

アがあるなら別だけど……。(ぼち男、頭陀袋の中を探る。) 出すの？！

ポチ男 何をです？

たま子 どこでもドア。

ポチ男 そんなものはありません。

ポチ男、頭陀袋の中から簡素な木の札を取り出す。木の札には墨で、通行手形と書いてある。

たま子 何それ？

ポチ男 読んで字の如く、通行手形です。これさえあれば、船であろうと飛行機であろうと乗り放題です。

ママ それなら豪華客船でもファーストクラスでも乗り放題？

ポチ男 ええ……、まあ。

パパ だから観光旅行じゃないって……。

ママ いいじゃない、どうせ乗り放題なんだし快適な方が良くない？ねえ、たま子。

たま子 そんなの嘘に決まってるじゃない。ママ、信じてるの？

ママ ええ、信じてるわよ。ねえ、あなたは？

パパ ああ、もちろん信じてるよ、あたりまえじゃないか。

たま子 騙されているのはパパとママの方よ。こんな子供騙し……。

ポチ男 皆さんの分もありますから、旅に出たらお渡しします。もちろんたま子さんの分もありますよ。

たま子 そんなものいらなから……！

チン 準備が出来たようですね。善は急げと言います。さあ、出発だ！

たま子 出発……？

ママ あなた、たま子はどうするんです？縛ったままじゃ歩けないわよ。

パパ そうだなあ……。チンさん、足だけでも……。

チン いいえ、そのまま連れて行きましょう、暴れられても困ります。

たま子 ちょっと待ちなさいよ！わたしはどこにも行かないって言ってるじゃない！

チン ポチ男。

ポチ男、騒ぐたま子を押さえつけ、再びガムテープで口を塞ぐ。そして軽々とた

ま子を担ぎあげる。

ポチ男 ごめんなさい。少しの辛抱ですから……。
ママ キンギョちゃんはどうするの？

ポチ男 心配いりません。旅が始まれば、後からちゃんと付いて来ますから。
チン この家を出たら、旅の始まりです。さあ、出発だ！

チンたちの行く手を遮るように、所長登場。

所長 何だお前たちは？！（パパとママに気づいて。）玉山さん？まだいらしたんですか。

玉山君は？（たま子の呻き声で、ポチ男に担がれているたま子に気づき。）玉山君……？

（ぼち男に。）君、玉山君を下ろしなさい！

チン ポチ男。

ポチ男、たま子を床に下ろす。

所長、素早くたま子のところへ。

所長 玉山君、これはいったいどう言う事なんだ？

たま子 ……（呻くだけ。）

所長 ああ。（たま子の口のガムテープをはがす。）

たま子 所長！（泣きじゃくる。）

所長 玉山さん、これはどう言う事なんです？どうして玉山君がこんな目に……？

パパ たま子がいとお世話になっています。

所長 いや、今はそんな事……。

ママ もうお帰りになったんじゃないの？

所長 ええ、ちよつと忘れ物を……。

パパ 不倫しているとか……？

所長 何の話です？

ママ しらばっくれちゃって……。

所長 私は何も……。

パパ 会社の娘だとか……？

所長 違いますよ！

ママ じゃあ、よその娘なのね？

所長 だから、私は不倫なんてしてません！いい加減にしてください。

パパ たま子、どう言う事なんだ？

たま子 だって所長、最近早く帰るじゃないですか。それもわたしに黙って……。

所長 別に早く帰ってる訳じゃない、本社の会議に出てるんだ。君も知ってるだろ、最近業績が伸び悩んでるの。だから度々本社からお呼びが掛かるんだ……。この事は今朝の朝礼で話したはずだよ。まさか聞いていなかったのか？！

たま子 そうでしたっけ……。？たぶん、そこのところだけ聞こえなかったんだと思います。す。

所長 嘘を言っちゃいけない。君は私の目の前に立っていた。聞こえないはずがないだろ！ どうせ違う事でも考えていたんだろ？

たま子 そんなことはありません。

所長 だったら、立ったまま目を開けて寝てたのか？

たま子 たぶん……。そうだと思います。

所長 君は私をバカにしてるのか？

たま子 バカにするなんて……。ちよつとは尊敬しています。

所長 ちよつとか……。それは良かった。それで、君がどう言う理由で手と足を縛られ、何でここにホームレスがいるのか、ちよつと尊敬している私に説明してもらえないか？

ポチ男 僕たちはホームレスではありません。

所長 (たま子に。) こいつらはホームレスじゃないのか？

パパ 所長さん、この人たちはホームレスではありません。私の仲間です。と言うか、これから仲間になります。家内も、そしてたま子も……。

所長 やっぱり、きみも仲間だったのか。こんなところにホームレスを引っ張り込んで、私を陥れるつもりだな……。私が首になるのを、笑って見ているつもりだろ。

たま子 違います！それは所長の被害妄想ですよ。わたしは仲間なんかじゃありません。拉致されかけたんです。所長も見てたでしょ？わたしが連れて行かれそうになったの……。

所長 うん、確かに私は玉山君が連れて行かれそうなどころを見た。でも、君のご両親がどうして……？

たま子 パパとママはこの人たちに騙されてるんです。世界中どこでも好きなどに連れてってやるって。でも本当は私たちを拉致して、どこか知らない危ない国へ連れて行く気なんです。

所長 お前たち、本当はホームレスじゃないな？！

ポチ男 だからホームレスじゃないって言ってるのに……。

所長 (チンに。) あんたがリーダーか？

チン まあ、そのようなものです。

所長 お前たちは何者だ？テロリストか？それともどこかの国の工作員か？どっちにしてもこの人たちを連れて行ってどうする？特に、この玉山たま子は何の役にもたないぞ。

たま子 何よそれ！

チン 私たちはあなたが考えているような者ではありません。たま子さんはともかく、玉山さんご夫婦は自ら望んで私たちの仲間になるのです。

所長 どうせお前たちが洗脳したに違いない。

たま子 所長、早くこのロープほどいてください。

所長 えっ?・・・ダメだ。それはできない。

たま子 どうしてです?

所長 そんな事をして私が殺されでもしたらどうするんだ。

たま子 所長はわたしを見捨てる気なの?可愛い部下がどうなってもいいって言うの?!

所長 大丈夫、君はただ拉致されて見知らぬ国へ連れて行かれるだけだ。殺されはしないだろう。それにこんなことを言うのも何だが、君はそれほど可愛くない。

たま子 何ですって?!

パパ 今のは聞き捨てならないぞ、可愛い娘に向かって可愛くないとは何事だ!

チン まあまあ玉山さん、どうやら所長さんは、黙って私たちを行かせてくれるみたいですよ。

たま子 ダメよ所長、わたしを見捨てないで!

所長 玉山君、すまない。妻と幼い子供を残して死ぬ訳にはいかないんだ。

たま子 嘘よ。奥さんとは毎日喧嘩ばかり、子供にも嫌われてるって言ってたじゃない。

所長 は自分が死にたくないだけでしょ?!

所長 そうさ、そのどこが悪い?

たま子 そうやってすぐ開き直る。最低ね!

ママ 本当、男って最低だわ。

所長 最低で結構。

ママ また開き直った!

チン まあまあ奥さん・・・さあ、出発しましょう。ポチ男。

ポチ男、再びたま子を担ぎ上げる。

たま子 いやー!所長!裏切り者!恨んでやる。絶対恨んでやる。たとえどこに行っても取り憑いてやる!

所長・・・ちよつと待った!

チン どうしたんです?

所長 あの、玉山たま子だけでも置いて行ってもらえませんか?

たま子 所長、助けてくれるの?

所長 ああ、君のことだから本当に生霊になって、私に取り憑きそうだ・・・。

チン 所長さん、申し訳ないがそれはできません。

所長 (携帯電話をとりだし。) だったら警察に来てもらいます。あんたたちは知らないだろうが、警察署は目と鼻の先、ここへ来るのに5分とかかりませんよ。

ポチ男 気にせずに行きましょう。玄関を出るのに1分とかかりません。

パパ チンさん、ポチ男君の言う通り、行きましょう。

チン ……。

所長 さあ、どうする？

パパ チンさん！

チン 仕方がありません。たま子さんは置いて行きましょう。ポチ男。

ポチ男、たま子を下におろす。

たま子 所長やりましたね！今日ほど所長が頼もしく思えた日はありません。

パパ どうしたんです？チンさん。もうすぐそこですよ。その玄関を出れば私たちの旅が始まるんです。今さらたま子を置いて行くなんて、それはできません。さあ、行きましょう。

チン いけません、私に従ってください。

ママ どうしてなんです？そんなに警察が怖いんですか？

チン 私はタビトの長です。タビトと言う存在を守らなくてはいけない。警察を甘く見てはいけません。日本の警察は優秀です。所長さんが警察に通報することによって、私たちタビトの存在そのものが危うくなる可能性があるのです。

パパ どういうことですか？旅に出してしまえばこの世の縁は断たれるはず……。

チン 断たれるのは人との縁です。ポチ男、お前にわかるか？

ポチ男 はい、たぶん。

パパ 説明してくれないか？

ポチ男 はい。もし所長さんが警察に通報するとしたら、「たま子さんが何者かによって拉致されようとしている。」と言う感じかと思います。この通報内容はたとえ僕たちが旅に出たとしても、警察に記録として残ることになります。この記録を見て、日本の真面目な警察官が捜査をしないとと言う保障はありません。

ママ たとえ警察が捜査したって、私たちのことはわからないでしょ？唯一の目撃者、所長さんとの縁も切れるし……。

ポチ男 そうです、人をあてにした聞き込み捜査で僕たちにたどり着くことはできません。

ただ問題は、今街中にあふれているものです。

パパ それは……？

たま子 防犯カメラでしょ。

チン たま子さん、正解です。ポチ男、私に何かあったとき、タビトの長はお前だ。物事はよく考えた上で判断しなくてはいけない。わかったな？

ポチ男 はい、肝に銘じます。

チン うん。私たちはタビトとは言え普通の人です。カメラには映ってしまうのですよ、

玉山さん。おそらくどこかの防犯カメラに私たちの姿が記録されているはずですよ。

を警察が調べたなら、私たちを怪しむ者もいるでしょう。そうなれば旅を続けられなくなる可能性もあります。前にも言いましたが、タビトが旅を終える時、それは死を意味します。タビトの存在そのものが危うくなるのです。ですから……。

パパ チンさん、それでもたま子を残して行く訳にはいきません。お願いです、この子も連れて行ってください。

所長 そんな事を言ってもいいんですか？玉山さん。親子と言ってもこれはれっきとした犯罪ですよ。警察に通報してもいいんですか？

たま子 パパ、もういい加減あきらめて。わたしを自由にして。

パパ ダメだ。お前を置いて行く訳にはいかない。

ママ そうよ。たま子を置いて行くくらいなら、私が所長さんを……！

所長 私をどうするって言うんです？まさか、私を殺すだけでも……？

ママ ええそうよ。たま子を置いて行くくらいなら、私が所長さんを殺すわ！

所長 (大笑い。)女のあなたが私を殺せるとでも思っているんですか？それも素手で……。

ママ 私をバカにしてるの？！ポチ男君、何か出して。

ポチ男 何かって、何です？

ママ この男を殺せたら何でもいいのよ！

ポチ男 そんなものではありませんよ。

ママ その袋の中探ってみなさい、何か出て来るでしょ！

ポチ男 ドラえもんじゃあるまいし、何も出てきませんよ。

ママ もう、使えないわね。

ポチ男 そんなこと言われても……。

パパ だったら私があんたを殺す！

所長 玉山さん、本気ですか？私はあなたよりずっと若いですよ、私に勝てますか？

パパ ポチ男君、何か出さないさい。

ポチ男 だから何もないですって……。

所長 さあ、どうする？このまま玉山君を置いて出て行った方がいいんじゃないのか？

たま子 所長、かっこいい、尊敬します。

所長 これが本来の私の姿だ……。

所長、鈍い打音と同時に、その場に倒れる。

所長が倒れた後ろには、手にハンマーを持ったキンギョが立っている。

キンギョ これが本来のお前の姿だ。

ポチ男 キンギョ？

たま子 所長？！所長！！あんた、所長に何をしたの？！

キンギョ (ハンマーを指して。)これで一発ぶん殴ってやったのさ。心配するな、確実に

仕留めてやったからな。

ポチ男 所長の首に手を当て、脈を診る。

たま子 何言ってるんよ。この人殺し！パパ、ママ、見たでしょ？この人たちは人殺しなのよ。それでも一緒に行くって言うの？

ポチ男 大丈夫です、死んではいません。と言うか、ただ気を失っているだけのようです。

キンギョ 嘘だろ？！俺は確かにこいつの後頭部を確実に一撃したはず……。それで気を失ってるだけって……。こいつは不死身か？

たま子 所長、起きて！目を覚ますのよ。所長！

ポチ男 たま子さんには申し訳ありませんが、所長さんは当分の間目を覚まさないでしょう。ですから今のうちに行きましょう。

たま子 いやよ！所長起きて！所長！

ポチ男 たま子さん、無駄です、諦めてください。さあ、行きますよ。

キンギョ おい、行くなって、どこに行くつもりなんだ？

パパ 旅に出るんだよ。

ママ キンギョちゃんよろしくね。

キンギョ 何だ、結局おっさんたちも一緒に来ることになったのか。いいけど、足手まといになんよ。

パパ ああ、わかってるよ。

キンギョ まさか、(たま子に。)お前も行く気か？

たま子 行かないわよ！誰が行くもんですか。

キンギョ だろうな……。ところで、何でお前縛られてんだ？何か悪いことしたのか？

逆さずりの刑か？

たま子 あんたじゃあるまいし……。

ポチ男 たま子さんも旅に出ることになったんだ。

キンギョ ええっ！マジかよ？

たま子 行かないって言ってるでしょ！

キンギョ 行かねえって言ってるぞ……。ふーん、なるほど。逃げられないように縛られてるって訳か。ふーん……。(不敵な笑み。)

たま子 あんた、何考えてるの……？

キンギョ たま子お婆さんは、そろそろお化粧直したいんじゃないのかな？

たま子 何よ急に……。

キンギョ でもそれじゃあ自分でできないわよねえ。

たま子 だから何だって言うのよ……？

キンギョ だから……。私がしてあげる。お化粧品持ってるのよ、これでも一応レディ

「だから……。(頭陀袋のなかから化粧ポーチを取り出し、中から数種の化粧品を出す。) どれ、すごいでしょう?」

たま子 やめなさいよ。あんたに化粧なんてできっこないんだから!

キンギョ (たま子の耳元で。) 心配すんな、俺は昔からぬり絵だけは得意なんだ。

たま子 やだあ! パパ、ママ、何とかしてよ。やめさせて!

パパ どうして? やってもらいなさい、せっかくなんだから。

ママ そうよ、親切で言ってくれてるんだし。

たま子 親切じゃない! ポチ男、あんたが止めなさい。

ポチ男 ダメですよ、せっかくキンギョが女の子らしくなったんですから。

たま子 なってないって……。

キンギョ (たま子の耳元で。) 諦めなよ。さあ、たま子おばさん始めるわよ。くれぐれも

動かないでね。もし動いたら仕上りの保障はないわよ。

たま子 (泣き声で。) やさしくしてね。

キンギョ、たま子の顔に化粧をし始める。まるで、お絵描きのように。

皆、キンギョの化粧を固唾を飲んで見守る。

そして、キンギョのお絵描き終了。

キンギョ ほら、できたわよ。見て、完璧じゃない。

一同、たま子の顔に注目。

たま子 どうなの……? (キンギョに。) 鏡見せてよ。

キンギョ そんなもん、持ってねえよ。

たま子 あんた、鏡なしでどうやってお化粧するのよ?

キンギョ 俺は化粧なんてしないし……。

たま子 やっぱり……。ママ、どうなの?

ママ えっ……。?! たま子には少し派手目かなって思ったけど、でも……。うん、悪く

はないわよ。ねえ、あなた。

パパ あっ、ああ……。なかなか斬新でいいと思うよ。

たま子 派手目で斬新なの……?

パパ チンさんはどうです?

チン よくわかりませんが、こう言うのをアートって呼ぶんですかね?

たま子 派手目で斬新で……。アート? 何なのそれ? もっと具体的に……。ポチ男?

ポチ男 僕ですか?!

たま子 そうよ、あんたが一番まともそうなんだから、ちゃんと言いなさいよ。

ポチ男 わかりました……。そうですねえ、具体的に言うならば……。ベラに似ていると思います。

たま子 ベラ……？

ポチ男 御存じないですか？結構有名な方ですけど。

たま子 そうなの？ママ、知ってる？

ママ ええ……。知ってることは知ってるけど……。

たま子 その人、綺麗？

ママ まあどちらかと言えば……。綺麗系かな……？

たま子 綺麗系……。うふふふ。

キンギョ なあたま子、いいこと教えてやろうか？そのベラって言うのはな、妖怪人間だ。

たま子 妖怪人間……。？妖怪……。？人間……。？どっちなの？

チン まあ、その件はこのくらいにして、そろそろ出発しないと所長さんが目を覚ましてしまいますよ。

たま子 妖怪？人間？どっちなの？

キンギョ そろそろ出発って、これから旅に出るのか？

たま子 ねえ、どっちなのよ？

キンギョ そんなの聞いてねえよ。

ポチ男 所長さんが目を覚ます前に出発しないと、また厄介なことになるだろう。

たま子 どっちなのよ？

キンギョ そんなときはまた、ぶん殴ってやるよ。今度は絶対しとめてやる。

チン つべこべ言うんじゃない！出発だ。

たま子 だから、妖怪と人間、いったいどっちなのよ？！

キンギョ うるせえな！妖怪に決まってるだろ！

たま子 妖怪？！嘘でしょ？鏡見せてよ！

キンギョ やだ、絶対やだ。だってもう歩けねえよ。メシだってまだじゃねえか。メシ食うまで動かねえからな！

チン 困った奴だ。タビトは本来食わずとも生きていけるもの。タビトの死は旅を終えた時だからな。食欲という欲を断ち切れ、そうすれば腹など減らん。

キンギョ うるせえ。俺たちだって腹も減ればクソもする。お前だって食ってるじゃねえか。三日前、三人で焼肉食ったの忘れたのか？

ママ (ポチ男に。) 焼肉食べたの？

ポチ男 ええ、まあ……。

ママ そうなの、羨まし。私たちなんて、ズーっとカップ麺なのに……。

チン そうだったかな……。？そんなことは忘れた。

キンギョ ボケた振りしやがって……。

たま子 キンギョちゃん、ちよつと……。

キンギョ 何だよ急に、気持ち悪い……。

たま子 さっきは素敵なお化粧ありがとう。

キンギョ おお、礼にはおよばねえよ。

たま子 女の子同士、二人だけで話があるんだけど……。

キンギョ 話って……？

たま子 だから、ちよっと。

キンギョ、たま子のそばまで近寄る。

キンギョ 何だよ？

チン、パパ、ママ、ポチ男、二人の話に耳をそばだてる。それをベラのメイクで睨みつけるたま子。たま子の顔を見てひるむ四人。

たま子 二人だけの話って言ったでしょ。離れててよ。

パパ あのままにさせておいていいんでしょうか？

チン まあ、いいでしょ。何と言っても女の子同士ですから……。

ママ どうして私だけ仲間はずれなの？女の子なのに……。

チン 奥さんはもういいでしょ。

ママ どう言う意味？！

二人から距離をとる四人。

キンギョ もういいだろ。何だよ、話って？

たま子 わたしと取引しない？

キンギョ ……取引って何だよ？

たま子 わたしを逃がしてくれたら、おいしいもの御馳走してあげる。

キンギョ 本当か……？おいしいものって……？

たま子 何だっけいいわよ。何が食べたい？

キンギョ うーん……、焼肉……ダメか？

たま子 いいわよ、焼肉くらい……。だったらほどこいて。

キンギョ でもなあ……。

たま子 お腹減ってるんでしょう？駅前だね、おいしい焼肉屋ができたの。全部特上にしてあげる。

キンギョ 特上……？でもなあ……。

たま子 あんた、逆さ吊りの刑が怖いんでしょう？

キングヨ そんなもん・・・、怖くねえよ。

たま子 だったら早く。

キングヨ ……。

たま子 やっぱり怖いんだ。あんたそれでも男？

キングヨ 俺は女だ！

たま子 そう、もういい。見損なったわ！

キングヨ わかったよ。その代り、焼肉食わせろよ。

たま子 もちろんよ。わたしが逃げたら、あんたもすぐに来るのよ。駅前で待ってるから。

キングヨ わかった。

キングヨ、頭陀袋の中からナイフを取り出し、たま子の手足のロープを素早く切る。

たま子、玄関めがけて逃走。

パパ たま子待ちなさい！

チン 大丈夫、心配いりません。

ママ でも追いかけないと・・・。

ポチ男 キングヨ！お前・・・。

キングヨ、たま子の後を追って逃げようとするが、素早くポチ男に取り押さえられる。

キングヨ はなせえ！焼き肉が・・・！

間もなく、たま子は何かに押し戻されるように、後ずさりしながら戻って来る。

チン ほーら、戻ってきた。

後ずさりするたま子の前には、白いワンピースに真っ赤な返り血を浴び、手にはサバイバルナイフ、まるでゾンビの様相のフミが立っている。たま子はさらにフミに押し戻され、ついにパパとママの手に。

ママ フミちゃん・・・？あなた、フミちゃんなの？

フミ おばさん。おじさんも？

パパ やあ、フミちゃん。どこかで仮装パーティーでも・・・？

たま子 そんな訳ないじゃない！フミは今日、彼とデートなのよ。

フミ あんた、たま子なの？そんな顔で外に出たら逮捕よ。

たま子 フミの方こそ、そんなゾンビみたいな恰好でウロウロしたら射殺よ。

フミ この人たち、誰？ホームレス？（所長に気づいて。）所長？死んでる？

ポチ男 僕たちはホームレスではありません、タビトです。所長さんは、ただ寝ているだけです。

フミ そうなの……。

たま子 フミ、どうしたの？何があつたの？その大きなナイフどうしたの？

フミ （サバイバルナイフをたま子に突きつけて。）これ？（ひるむたま子。）買ったの。

たま子 何でデートにそんなもの持って行ったの？

フミ ……わからない。

たま子 で、それ何に使ったの？

フミ 刺したの。

たま子 彼を？

フミ うん。

たま子 ああ……、最悪。とにかくフミ、そのナイフ放して、危ないから。

フミ ダメなの。放そうとしても、手が……。

ママ フミちゃん、落ち着いて。いい、これから私の言う通りにするのよ、わかった？

フミ うん。

ママ 何してるの?!たま子、あんたも一緒にするの。

たま子 わたしも……?

ママ、たま子をフミの横に並ばせる。

ママ そうね、いいわ。じゃあ始めるわよ。まずは深呼吸から。はい、吸ってえ、吐いて

え、また吸ってえ、吐いてえ。いいわよ。次は目を閉じて、そして思い出してごらんな

さい。あなたたちがまだ小さかった頃の事、まだ幼稚園児だった頃の事を……。

たま子 そんな昔の事、思い出せないわよ。

ママ いいから、思い出すの!あの頃、たま子とフミちゃん、二人でよく悪さをしたわよ

ねえ……?

キングヨ どんな悪さしたんだ?

たま子 あんたは入ってこないで。

ママ そうねえ……、あっ……!例えば、園長先生が大事に飼っていたインコ、野良

猫にあげたの憶えてる?

たま子 そんなことした?フミ。

フミ しないわよ。

ママ したのよ、忘れてるだけ。それと……。

たま子 まだあるの？

ママ これは憶えてるはずよ、かなり衝撃的な事件だったから……。トイレでおしっこしてる男の子のおチンチン振り回して、他の子たちにおしっこ掛けまくったの憶えてるでしょ？

キンギョ おまえたち、やるじゃねえか。で、どっちがチンチン振り回したんだ？

たま子 あんたは入ってこないでって言ってるでしょ！

フミ おチンチン振り回したのはたま子の方よ。

たま子 違うわよ。わたしはその子の体を押さえていただけ、おチンチン振り回したのはフミでしょ。

ママ 何言ってるの、おチンチン振り回したのは……。

パパ やめないか、お前たち！おチンチン、おチンチンって恥ずかしげもなく……。

ママ うん（咳ばらい）。まあ、そんなあなたたちでも、お遊戯は得意だったでしょ？

たま子 まあ、どちらかと言えば……。

フミ 本当？たま子はスキップもろくにできない子だったのに？

たま子 うるさいわね！わたしに合わなかっただけよ。

ママ わかったわ、もう……。そんなのどっちでもいいから……。さあ、いくわよ！

たま子 何する気？

ママ 決まってるじゃない、お遊戯よ。

たま子 そんなのもう忘れたって……。

ママ 大丈夫、誰でも知ってるやつだから。じゃあいくわよ、イチニイサンはい、（歌う。）
むすんで、ひらいて……。

たま子とフミ、ママの歌に合わせて、むすんで、ひらいて、をする。
ひらいて、のとこで、フミの手からナイフが落ちる。

フミ 見て、たま子、ナイフが……。おばさん……。

ママ ほら、できたじゃない。よかったわね。

キンギョ 前ふりがなげえんだよ。最初つからやればいいじゃん。

フミ でも、どうしよう？私、とんでもない事を……。

たま子 それで、彼はどうしたの？

フミ わからない。でも、死んでると思う。いいえ、確実に死んでるわ。だって二十回も

刺しちゃったんだもの（泣き崩れる）……。

キンギョ げっ、残酷。刺した回数憶えていやがる。

たま子 あんたが言うか……。？！でも、どうしてそんなことになったの？今日は彼のお祝いだったんじゃ……。

フミ（急に泣きやんで。）あいつ、裏切ったの。他に女がいたの……。あの後予約し

てたレストランにいったわ。あいつはもう先に来てた。でも、あろうことかその女も一緒に来てたのよ・・・！私は動揺する気持ちを精一杯抑え込んで席に着いたわ。そしてあいつが私に言ったの、「今まで本当にありがとう。これでやっと彼女と結婚できる。」あいつは始めから試験に合格したら、あの女と結婚するつもりだったのよ・・・。私、それまで抑えてた気持ちが一気に爆発して、気がついたらあいつにサバイバルナイフを突きつけてた。

たま子 ちよつと待って・・・、何であんたサバイバルナイフなんて持ってたの？

フミ だから、買ったって言ったじゃない。

たま子 だから、何でそんなもの買ったのよ？

フミ 安かったのよ。レストランに行く途中、アーミーショップがセール中だったの。

たま子 なるほど。

キンギョ 納得するのかよ？！

たま子 それで・・・？

フミ それで、サバイバルナイフを突きつけたら、あいつ慌てて店飛び出して逃げたわ。

私は無我夢中であいつを追いかけた。そして、ついに追いついたの。

キンギョ 怖え・・・。

ミュージック、ピンクレディー「ウォンテッド。」

玉子とフミ、歌い踊る。歌い終われば、何事もなかったかのように・・・。

フミ 最初に背中を一突き。あいつは転がるようにもがいてた。そして仰向けになったところを押さえつけて、後は上から・・・。

たま子 もういい、フミ！それから十九回刺したのね？

フミ 違った。背中の一突き忘れてた。だから二十一回。

たま子 あつ、そう・・・。でも結局フミは、お金をくれる親切なおばさんだったって訳ね。

フミ あんたって、とことん優しくない女ね。

たま子 お生憎様。

ママ たま子、あなた友達でしょ？どうしてそんな言い方しかできないの。フミちゃんは

彼がその試験に合格するためにお金を出したんでしょ？ただその彼がフミちゃんの事を

何とも思っていなかっただけのことじゃない。ねえ？

キンギョ そのままだし。

フミ おばさんまで・・・。(泣く。)

たま子 ねえフミ、警察行こう？

フミ 警察？

たま子 うん。自首すれば少しは刑が軽くなるって言うじゃない。ねえ、そうしょ？

キングヨ ちょっと待て、(フミに。)お前の彼氏、死んでねえかもしれないぞ。

たま子 いい加減なこと言うんじゃないわよ！二十一回も刺されて死なない人間がいると思う？

キングヨ いるじゃねえか、そこに、そこで寝ている奴。俺が無敵のハンマーで確実に仕留めてやったのに、生きてやがる……。

たま子 何よ？その無敵のハンマーって……。

キングヨ 俺の無敵のハンマーはな、どんな強い奴でも一撃で倒せる最強の兵器だ。

たま子 その最強の兵器、見せてみなさいよ。どうせピコピコハンマー並だと思うけど……。

キングヨ 何だ？ピコピコハンマーって……。 (頭陀袋の中を探り、何かを出す。) 見ろ！

これが俺の最強の兵器だ……。

たま子 それがピコピコハンマーよ。

キングヨ えっ……？これじゃねえ。(また、頭陀袋の中を探り、何かを出す。) これだ！

たま子 それもピコピコハンマーよ。

キングヨが頭陀袋の中を探り、取り出すものはすべてピコピコハンマー。

キングヨ 何でだ……？やいチン！お前だろ？こんなことするのは……。俺の最強兵器どこやった？！

チン (頭陀袋の中から何かを取り出し。) これのことか？

たま子 それもピコピコハンマーよ。

チン それなら私は知らん。

キングヨ ポチ男だな。返せよ。

ポチ男 (頭陀袋の中から何かを取り出し。) これのことですか？

たま子 ピコピコハンマーよ。

パパ (手にハンマーを持って。) これのことかい？

キングヨ おっさん、お前か……。こんなふざけたまねしやがって……。

パパ 私は何もしてない。ここに落ちてただけだ。

キングヨ いいから、返せよ。

チン その最強兵器とやらは、玉山さんが持っていてください。

パパ ええ、そうしましょう。キングヨちゃん、君が女の子らしくなったら返してあげよう。

う。

ポチ男 それはいいですね。まあ、無理だと思いますが……。

キングヨ 何だよおまえたち、俺に女を求めているのか？何が目的だ……？俺の体か？

ママ あなた、そうなの？！

キングヨ (女の子らしく。) ねえ、おじさん、返して、お願い……。

パパ ダメだね、そんなんじや。君の心が本当に女の子らしくなったら返してもいい。ま

あそうなつたら、こんなもの必要ないと思うけど。

キンギョ 何だよそれ！返せよ、俺の最強兵器。返せよ、無敵のハンマー。返せ！返せ、

返せ・・・！あーん、返せよ。(泣く。)

たま子 フミ、自首しよ？

フミ 私、刑務所に入るの？

たま子 たぶん、そうなると思うけど・・・。

フミ どれくらい刑務所に入ってるの？

たま子 それは・・・。(ポチ男に。)どれくらい？

ポチ男 そうですね・・・、フミさんのケースで言えば、情状酌量の余地があつたとして

も最低十年は・・・。

フミ 十年・・・?!女の盛りを十年も刑務所で送れって言うの・・・?たま子は・・・?

あの男と結婚するつもりなの？

たま子 するわよ。

フミ そんなの不公平じゃない！たま子は何？私が刑務所に入ってる間に、結婚して、子

供産んで、女の幸せに浸ってる訳？そんなの許せない！

たま子 フミ、あんたね・・・。

ママ 大丈夫よ、フミちゃん。たま子は結婚なんてしないから。

パパ そうだよ。たま子は結婚しない。そんなことは父親である私が許さない。だから安

心しなさい。それに、たま子はこれから私たちと一緒に旅に出ることになったんだ。

フミ 旅・・・?旅行に行くの？

パパ 旅行じゃなくて、旅に出るんだ。だからフミちゃんとは、もしかしたらもう会えな

いかもしれない・・・。

フミ もう会えない・・・?もう会えないの？たま子とも・・・。

たま子 それはパパたちが勝手に言うてること、わたしはどこにも行かないから。

フミ よかった。たま子がいなくなったらどうしようかと思った・・・。で、結婚は？

たま子 するに決まつてるじゃない。

フミ ダメ。そんなの許せない。たま子だけが幸せになるなんて不公平じゃない。

たま子 何勝手なこと言ってるの？あんた、自分がしたこと忘れてないでしょうね・・・?

フミ は人を殺したの。それも好きだった人を滅多刺しにしたのよ。信じられないわ。

フミ 滅多刺しになんてしてないわよ。二十一回刺しただけ・・・。たま子のせいよ。私

があいつを殺すハメになったのは、あんたのせいなのよ！

たま子 出た。何でも人のせいにする、フミの悪い癖・・・。だいいちわたしが何をした

って言うの？

フミ たま子があんなこと言うから・・・。あいつは私の事を、お金をくれる親切なおば

さん程度にしか思っていないって・・・、そんなこと言うから・・・!

たま子 でも、結果的にそうだったじゃない。

フミ そうよ、あんたの言う通りよ。でも、たま子がそんなこと言わなかったら、サブイバルナイフなんて買わなかったのに……。

たま子 それはセールで安かったから……。フミ、まさか……。

フミ 違うわ……。！ 始めから彼を殺すつもりなんてなかったの、本当よ……。でも、今まで彼を支えてきたのは私なのよ。彼にすべてを捧げてきたの。それなのに、あんな小娘に手を出してたなんて、許せると思う？！ だから殺ってやったのよ。たま子だって、私の立場だったら絶対殺ってるはずよ。

たま子 わたしは好きな人なら、何があっても殺したりしない……。

フミ そうかしら……？

たま子 (ポチ男に。) ねえ、これって情状酌量の余地アリ？

ポチ男 わかりませんが、たぶんナシだと思います。凶器を事前に殺害目的で購入したのであれば、それは計画的殺人ととられる可能性が大です。そうなれば刑期は少なくとも十五年、最悪二十年と言う事も考えられます。

フミ 二十年？！ そんなのヤダ。出て来たときには真正銘のオバサンじゃない……。私、自首なんてしないから。絶対しないから！

たま子 フミ、自首しないでどうするの？！ ずっと逃げ回るつもり？ 日本の警察はそんなに甘くはないのよ。(チンに。) ねえ、そうでしょ？

チン ええ、その通りです。警察はそんなに甘くありません。たとえ逃げられたとしても、その逃亡生活は過酷なものになるでしょう……。フミさんとおっしゃいましたか？

フミ はい。

チン だったら……。私たちと一緒に旅に出ませんか？

フミ 私もホームレスになるんですか？

チン 違います。タビトになるのです。

ママ フミちゃん、そうしなさい。旅に出れば、警察に捕まることはないのよ。

フミ 本当？

チン もちろん本当です。ただ、旅に出れば、フミさんに関わるすべての人たちとの縁が断たれることになります。ご両親や兄弟、友達とも生涯会う事ができなくなります。それを受け入れることができるなら、私たちと旅に出ましょう。

たま子 ダメよフミ！ だまされちゃ……。この人たちはあんたを見知らぬ外国に売り飛ばすつもりなの。そうやって荒稼ぎしてる、海賊たちなのよ。

キンギョ いつから俺達海賊になったんだ……。？ だいたい、チンやポチ男がそんな悪い奴なら、俺が真っ先に売り飛ばされてるだろ。

たま子 あんたに女の価値ないから……。

キンギョ そうかよ。だったら、たま子みたいな妖怪人間に女の価値があるのか？

たま子 何だって？！

チン フミさん、どうします？

フミ たま子とも会えなくなるの？

チン はい、そう言う事になります。

パパ えっ？どう言う事です？たま子も一緒なのに会えなくなるって……。ああ、そう言う事ですか。旅に出れば二人は、友達の縁を断たれてしまう、そう言う意味ですね？

チン いいえ、そう言う事ではありません。今回の旅でたま子さんと一緒にすることはありません。

パパ 何を言ってるんです？たま子を連れて行かないって言うんですか？！

チン そうです。

ママ そんな、約束が違うじゃないの！

チン 申し訳ありません。私の思い違いだったようです。それについてはお詫びします。

ですが、私はあなたがたと何も約束した覚えはありません。

ママ でも……。

パパ (ママを制して。)ママ……。チンさん、確かにあなたは何も約束していない。だったら、チンさんの思い違いって何です？

チン 私たちが旅をする目的は、一つは旅をすることそのものが目的です。それともう一つ、旅の仲間を募ることです。タビト募集といったところでしょうか……。ポチ男とキングヨもそうやって仲間になりました。

ポチ男 チンさんも、そうなんですか……。すみません……。

チン いいんだ……。私の場合は二人とはちがう。お前たちには言っていなかったが、私の父はタビトの長だった。だから私は物心ついた時には、すでにタビトとして旅をしていたんだ。生れながらのタビトと言ってもいいだろう……。私は人としての生活というものをしたことがない、だからお前たちが少し羨ましい。それがどんな生活だったとしてもな……。

ポチ男 チンさん……。

チン 余計な話をしてしまいました……。私にはあらかじめ、タビトとなる人がわかるのです。今回の旅では三人。それが玉山さんご夫婦、そしてもう一人の女性……。玉山さんご夫婦はすぐに確信が持てました。でも、もう一人の女性が誰なのか確信がなかったのです。玉山さんの置かれている状況からして、もう一人の女性がたま子さんだと思いついてしまいました。それが間違いだと思いはじめたのは、フミさんが現れてからです。

パパ たま子とフミちゃんを間違えて……？

チン そうです。私たちの仲間となるべきもう一人の女性は、フミさんの方でした。ですから、たま子さんのことは諦めてください。

たま子 パパ、わたしのことは心配しないで、もう子供じゃないの、一人でやっていけるから……。

ママ たま子……。

たま子 ママ、大丈夫。

チン 玉山さん、この埋め合わせは必ずしますから……。

パパ チンさん、いいんですよ。たま子のご事は諦めます……。そのかわり、たま子、幸せになるんだぞ。

たま子 うん、ありがとう。

ママ 孫の顔が見れないのが残念だわ……。それと、そのメイク、早く落とさない。

たま子 どうして？

ママ どうしても……。

たま子 フミ、あんたも行っちゃうの？

フミ ごめんね、たま子……。私怖いの。警察に捕まるのも、刑務所に入ることも、そしてこれからどうやって生きていくのかも……。

たま子 フミが行っちゃったら、わたしは明日から誰とピンクレディー歌って踊ればいいのか？わたしたちの夢は、歌って踊れるアイドルだったじゃない。

音楽、キャンデイズ「微笑みがえし」。

たま子とフミ、歌って踊る。

フミ (素に戻って。) そんなの初耳だわ……。でも、たま子の夢は、結婚してこのモデルハウスみたいな家で暮らすことですよ？

たま子 げっ、何でフミが知ってるの？そんな恥ずかしい事、あんたに言った？

フミ 言ったのよ、恥ずかしげもなく……。でもその夢、もうすぐ叶うんだね、悔しいけど。

たま子 うん。

フミ それと、私もそのメイク早く落とした方がいいと思う。

たま子 どうして？

フミ どうしても。

ポチ男 チンさん、そろそろ出発を……。

チン ああ、そうだな。

キンギョ ちょっと待て……。おい、たま子。

たま子 何よ？

キンギョ 俺との約束、忘れてねえだろうな？

たま子 約束……？

キンギョ 焼肉だよ！

たま子 覚えてるわよ。でも旅に出たら、あんたもわたしもそんな事忘れるんじゃないの？

キンギョ 俺はなあ、執念深いんだ、絶対忘れねえ！

たま子 わかったわ。もし忘れてなかったらわたしの所にきなさいよ、御馳走してあげる

から。

キンギョ 本当か？絶対だぞ。忘れねえからな！

たま子 はいはい。

チン それじゃあ出発だ。みんな一列に並んで……。

フミ たま子……。

たま子 フミ……。 (フミと見つめあって。) とつとつ行きなさいよ。

フミ わかってるわよ……。最後まで優しくない女ね。

チン さあ、出発だ！

タビト全員 オー！

タビト、一列で行進するように出発する。

たま子 パパ……！ママ……！フミ……！

タビトの姿が消える。

たま子 あれ……。何してるんだろ？ (腕時計を見て。) えっ？もうこんな……。やだもう……。

そして、ワタル登場。

ワタル (たま子のメイクにひく。) あんた……。！その顔……。

たま子 ワタル……。！わたしの顔がどうかした？

ワタル いや、あなたの趣味なら仕方がない……。

たま子 どうしたの？パパとママなら、まだ来ないわよ。

ワタル それならもういい。

たま子 えっ？

ワタル あんたにとつても朗報だ……。借金は返済された。

たま子 どう言う事？

ワタル どう言う事なんだろうな？俺にもわからない。ただ、借金が全額返済されたこと

は間違いない。俺はあんたに知らせに來ただけだ。

たま子 そうなの、ありがとう……。

ワタル (寝ている所長に気づき。) ところでこいつ、誰だ？

たま子 ……所長？どうしたのかしら……？

たま子、寝ている所長に、恐る恐る近づく。

ワタル 死んでるのか？

たま子 生きてるわよ。息してるもん。

ワタル あんた、何かしたんじゃないだろうな？

たま子 わたしが？！知らないわよ。

ワタル まあいい。とにかく俺の仕事は終わりだ。もうあんたに会う事もないだろ。じゃ

あな。

たま子 ちよつと……。会う事がないって、どう言う事？

ワタル だから、あんたの父親の借金はこれでチャラだ、もう俺の出る幕はないだろ。

たま子 違うわよ。そんな事はどうだっていいの。わたしたちの結婚の事よ。

ワタル あんたには申し訳ないが、俺はあんたの幼馴染か何だかの、そのワタルって奴じ

ゃない。そいつの振りをしたのは、あんたの父親の居場所が知りたかったからだ。まあ、

そう言う事だから……。

たま子 ワタルの言ってることが良く分からないの……。あなたはワタルよ。二人だけ

しか知らない小さい頃の思い出も、あなたは知っていたわ。

ワタル それは、当てずっぽうと言うか、たまたまの偶然だ。

たま子 また、わたしから逃げるつもりね？

ワタル 逃げるも何も……。

たま子 そんなに私が嫌？あのとときだって……。わたしが嫌いだから逃げたんでしょ？

ワタル ああ、そうだ。俺はあんたが嫌いだ。もういい加減にしてくれ。

たま子 女ね……。他に女がいるんでしょ？！

ワタル あんたには関係ない。じゃあな。

たま子 やっぱり……。

たま子 床に落ちているフミの残したサバイバルナイフを拾い上げ、ワタルに突きつける。

ワタル おい、何のつもりだ？！

たま子 ワタル、逃げないでね。このナイフ、よく切れそうだから……。

ワタル 落ち着け、とにかく落ち着け。

たま子 わたしは落ち着いてるわ。ワタルの方こそ落ち着いて。くれぐれも逃げちゃダメ

よ。もし逃げたら、わたし死に物狂いで追いかけるから。たとえワタルでも逃げ切れな

いわよ……。さあ、その女のこと話して。

ワタル 女……？

たま子 いるんでしょ……？その女、わたしより綺麗？

ワタル いや、全然……。

たま子 そうなの。もしかして、ブスなの？

ワタル ああ、ブスだ、どうしようもないブス……。

たま子 そう、どうしようもないブス。でも、そんなブスとどうして付き合ったりしたの？

ワタル あっ、あの……、それは……、ま、魔がさしたんだ。

たま子 浮気なのね？

ワタル ごめんなさい！

たま子 もう、しょうがないわねえ……、今回だけは許してあげる。でも、今度したら……。

所長、目を覚ます。

所長 玉山君？玉山君じゃないのか？

たま子 何よ！

たま子、所長にサバイバルナイフを突き付ける。

所長 ギャー！！よ、よ、よ、妖怪いー！

所長、再び気を失う。

たま子が所長に気を取られている間に、ワタルは逃亡する。

たま子 誰が妖怪よ、人間だっつーの……。ワタル……。ワタル……。？！逃げるな
って言ったのに。ふっふっふっ、逃がすかあー！

たま子、鬼の形相でワタルを追う。

一人残された所長、何か夢でうなされている様子。

所長 やめろー！（目を覚ます。）えっ？夢……。？よかった、危うく妖怪に殺されるとこ
だった……。うん……。？何で私はここに……。？あつ！会議の資料……。会議？！
（腕時計を見て。）ああ、ダメだ。大事な会議を……。どうしよう……。どう言い訳
を……。妖怪に襲われた……。？ダメだ、絶対首だ。じゃあどうする……。？落ち着
いて考える……。そうだ、私は資料を取りに戻って、急にお腹が痛くなった。あまり
の痛さに気を失い、気がついたら夜中だった……。よし、そう言う事にしておこう……。
うん、帰ろう……。
ちよっと待てよ……。玉山君を見たような……。玉山君……。！玉山たま子……！

所長の後ろから忍び寄る影。妖怪人間のようなメイク、片手にサバイバルナイフ、

大量の返り血を浴びたたま子だ。

「妖怪人間ベム」オープニングテーマ。

所長
いる訳ないか……。

所長、ふと恐ろしい気配を感じ、ゆっくりと振り返る。

暗転と同時に所長の「ギャー」という叫び声。

おしまい。